フィリピ書とその周辺世界における喜びの「情念」*

ペトラ・フォン・ゲミュンデン
須　藤　伊知郎（訳）

„Gaudeo, gaudete“ ──「私は喜ぶ、あなた方は喜べ！」この言葉でヨハン・ベンゲル[1]はフィリピ書をまとめています。たしかに人は、「私は喜ぶ、あなた方は喜べ！」というのがフィリピ書の（唯一の）テーマであるかどうかについて争

---

*訳注：2018 年 10 月 23 日、西南学院大学大学院大ホールで行われた公開講演。この講演は、P. フォン・ゲミュンデン「フィリピ書とその周辺世界における喜びの『情念』」J. フライ／B. シュリーサー／V. ニーダーホーファー編『ヘレニズム・ローマ世界におけるパウロのフィリピ書簡』（新約聖書に関する学問的研究 353）テュービンゲン、2015 年〔Petra von Gemünden, Der „Affekt“ der Freude im Philipperbrief und seiner Umwelt, in: Frey, J./Schliesser, B./Niederhofer, V. (Hgg.), Der Philipperbrief des Paulus in der hellenistisch-römischen Welt, WUNT 353, Tübingen 2015〕、223–254 ページの改訂日本語版である。この訳稿を訳者の 40 年来の信仰の兄であり、20 年間同僚であった故天野有教授に捧げる。

1　J. A. ベンゲル『新約聖書のグノーモン（釈義的覚書）』（1773 年）、シュトゥットガルト、1915 年〔J. A. BENGEL, Gnomon Novi Testamenti (1773), Stuttgart 1915〕、778 ページ：「手紙の要諦：私は喜ぶ、あなた方は喜べ」。以下を参照、H. シュリーアー『フィリピ書』（基準シリーズ 54）アインジーデルン、1980 年〔H. SCHLIER, Der Philipperbrief, Kriterien 54, Einsiedeln 1980〕、特に 82 ページ、J. A. モティア『フィリピ書の使信、イエス我らの喜び』（聖書は今日語るシリーズ）レスター、1984 年〔J. A. MOTYER, The Message of Philippians. Jesus our Joy, The Bible Speaks Today, Leicester 1984〕、11 ページ、L. ブルン「パウロのフィリピ人への手紙における『キリスト・イエスにあって』という定式に寄せて」『オスロ論叢』1 巻、1922 年〔L. BRUN, Zur Formel ‚In Christus Jesus‘ im Brief des Paulus an die Philipper, SO 1 (1922)〕、19-37 ページ（21 ページ）（「喜びについての手紙」）。さらに G. フリートリヒ「フィリピ人への手紙」J. ベッカー／H. コンツェルマン／G. フリートリヒ『ガラテア人、エフェソ人、フィリピ人、テサロニケ人およびフィレモンへの手紙』（ドイツ語新約聖書 8）ゲッティンゲン、1990 年〔G. FRIEDRICH, Der Brief an die Philipper, in: J. Becker / H. Conzelmann / G. Friedrich, Die Briefe an die Galater, Epheser, Philipper, Kolosser, Thessalonicher und Philemon, NTD 8, Göttingen 1990〕、125–175 ページ所収（168 ページ）：「この獄中書簡を［人は］喜びの手紙と呼ぶ［ことができる］」。

うことができるでしょうが、── それは疑いなくこの手紙の「主要テーマの一つ」[2]です。なぜなら、「喜び」はこのパウロの手紙において一つの一貫しているテーマだからです。11回〔この手紙には〕χαίρειν という動詞[3]、５回 χαρά という名詞が出てきます[4]。他の情念はこの喜びという中心的モティーフに帰属させられ、その下位に置かれています。さてしかし、フィリピ書における「喜び」の大きな意味は、まさに幸せで問題のない状況〔の結果としてそれ〕が表出されているものではありません。むしろパウロもフィリピの共同体も一つの困難な状況の中にありました。すなわち、パウロは牢獄の中にいて、彼の眼前には、自分の裁判が死刑という判決に至るかもしれない可能性が思い浮かべられていました（フィリ 1,7；1,12－18；2,17.25）。彼の手紙の宛先であるフィリピの人たちもまた、少なくとも「ローマ帝国周辺世界との諸問題に曝されて」いました[5]。その人々は脅かされ、差別されていたのです（フィリ 1,27－30）。

2　S. フォレンヴァイダー「チューリヒ聖書への注解、フィリピ書」M. クリーク／K. シュミット編『解説 ― チューリヒ聖書への注解』第 3 巻、チューリヒ、第二版 2011 年〔S. VOLLENWEIDER, Kommentar zur Zürcher Bibel, Philipperbrief, in: M. Krieg / K. Schmidt (Hg.), Erklärt – Der Kommentar zur Zürcher Bibel, Band 3, Zürich ^{2}2011〕、2456－2468 ページ（2457 ページ）。

3　そのうち 2 回は συν-との複合動詞として（フィリ 2,17.18）。単純動詞はフィリ 1,18（2 回）；2,17.18；2,28；3,1；4,4（2 回）；4,10 に見られる。

4　フィリ 1,4.25；2,2.29；4,1。

5　フィリ 1,7；1,29－30；4,6（μηδὲν μεριμνᾶτε）；さらに 2,30 参照。W. ポプケス「フィリピ書 4,4－7：発言と状況的背景」『新約学研究』50 巻、2004 年〔W. POPKES, Philipper 4,4－7: Aussage und situativer Hintergrund, NTS 50 (2004)〕、246－256 ページ（248 ページ）；S. J. クラフチク「フィリピ書における自己提示と共同体構築」P. グレイ／G. R. オディ編『聖書と伝承 カール R. ホラデイ記念初期ユダヤ教およびキリスト教論集』ライデン、2008 年〔S. J. KRAFTCHICK, Self-Presentation and Community Construction in Philippians, in: P. Gray / G. R. O'Day (Hg.), Scripture and Traditions. Essays on Early Judaism and Christianity in Honor of Carl R. Holladay, Leiden 2008〕、239－262 ページ（244 ページ）参照。フォレンヴァイダー『フィリピ書』（注 2 を見よ）2461 ページ、は「日常的な社会的村八分と経済的苦境」を考えている。L. ボアマン『フィリピ パウロ時代の市とキリスト者共同体』（新約雑誌補遺 78）ライデン、1995 年〔L. BORMANN, Philippi. Stadt und Christengemeinde zur Zeit des Paulus, NT.S 78, Leiden 1995〕、217－221 ページ、は問題の背景に立ち入っている。フィリピの教会は、地域を超えた繋がりを持つ、もう一つの競合的な政治的共同体に属していると感じていた（フィリ 3,20；同書 222－223 ページ）。つまり、自分たちは「フィリピの人々が持っていた従来の公式の宗教的・政治的世界観に対するオルタナティヴ」であると理解していたのである。パウロの福音は「元首制という宗教的・政治的プログラムに対する競合」と理解されることができた（ローマ皇帝即位の布告 εὐαγγέλια 参照、同書 224 ページ）。そこでその教会は「初期の元首制という公式の、社会を支え、支配を正当化する、宗教政治的なイデオロギーとの葛藤に」陥った（同書、224 ページ）。

そう、敵対視と起こりうべき迫害がユダヤ人会堂〔を頼ってそこ〕に向かってゆく動機となっていた可能性があります[6]。そのことをパウロが「キリストの十字架の敵たち」(フィリ 3,18) と名付けた者たちが宣伝していたのです。フィリピ書でとても大きな意義を持っている「喜び」は、つまり「死の危険と苦難にもかかわらず」[7]抱かれている喜びなのです。したがって、それは私たち現代人の日常心理の想定に反していますし、また広汎なユダヤ教・キリスト教以外の古代の想定に反するものです。

これが〔以下で〕詳しい考察を行う動機となります。第一部 (1) では、フィリピ書を理解するための背景として古代の情念心理学に向かいます。まずギリシア・ローマの (1.1) そして旧約聖書・ユダヤ教の文脈における「喜び」(1.2)、それから特に友愛の主題群 (1.3) そして *bona cogitare* の枠内での喜び (1.4) を探求します。

第二部 (2) ではフィリピ書にその受取人を基準とする視点で (2.1) そして著者を基準とする視点で (2.2) 取り組みます。つまり、まずパウロによって追求されている受取人に及ぼす影響を問い、それからパウロ自身に目を向け、彼が自分自身について何を語っているかを問います。

最後に第三部 (3) では、結論として古代の文脈の枠組の中で、フィリピ書における「喜び」を明確な輪郭で位置付けることを試みます。

1　古代の情念心理学

古代の情念心理学における「喜び」に目を向ける時、私は以下の問いに注目します。

— 喜びはどのように肯定的な情念として否定的な情念から区別され、時間的に位置づけられているでしょうか？

6　フォレンヴァイダー『フィリピ書』(注 2 を見よ) 2466 ページ。

7　M. テオバルト「フィリピ書」M. エープナー／S. シュライバー編『新約聖書緒論』(コールハンマー神学緒論叢書 6) シュトゥットガルト、第二版 2013 年〔M. THEOBALD, Der Philipperbrief, in: M. Ebner / S. Schreiber (Hg.), Einleitung in das Neue Testament, Kohlhammer Studienbücher Theologie 6, Stuttgart ^{2}2013〕、371－389 ページ (380 ページ)。

― 喜びはどのように苦難と、あるいはそれどころか死と関連づけられているでしょうか？
― 喜びは人間関係のどこで役割を演じているでしょうか？
― 喜びと神は互いにどのように秩序づけられているでしょうか？

1.1 ギリシア・ローマの情念心理学

まず、用語について前もってご説明しておきますと、χαρά と ἡδονή ── 喜びと楽しみ ── は、私たち現代の言語意識と同様、〔古代の〕ギリシア語文献においてもそれほどはっきりと区別はされていません。Χαρά（喜び）と ἡδονή（楽しみ）はそれどころか時折、たとえばプラトン、アリストテレス、そして初期のストア派において、交換可能です[8]。

── 喜びは人間にとって根本的な意義を持っており、肯定的な意味を含むものとされています。そのことを示しているのが、慣用の挨拶の定式 χαῖρε〔直訳すれば「喜べ」で、これが日本語の場合では「おはよう」「こんにちは」「さようなら」といったあらゆる場面での挨拶に使われました〕（ルキアノス『挨拶の言い間違い』２〔Lukian, Pro lapsu 2〕）です[9]。古代の悲劇はこの喜びの肯定

8　プラトンについては、H. コンツェルマン「χαίρω, χαρά, 他」『新約聖書神学辞典』9 巻、1990 年〔H. CONZELMANN, χαίρω, χαρά, κτλ., ThWNT 9 (1990)〕、350－362 ページ（351 ページ、36 行）；G. シュテーリン「ἡδονή, φιλήδονος」『新約聖書神学辞典』2 巻、1990 年〔G. STÄHLIN, ἡδονή, φιλήδονος, ThWNT 2 (1990)〕、911－928 ページ（913 ページ、21－23 行）参照。ストア派では我々はクリューシッポスによって初めて〔両者の〕区別を見出す、後述参照。語場「喜び」に属すさらなる概念は、コンツェルマン「χαίρω」351 ページ参照。

9　χαῖρε は意味の上では多義的である。それは挨拶と同様喜びも表現することができる。χαῖρε の両方の意味が活性化される可能性がある。W. B. スタンフォード『ギリシア悲劇と感情 入門的研究』ロンドン、1983 年〔W. B. STANFORD, Greek Tragedy and the Emotions. An Introductory Study, London 1983〕、102 ページ参照。― 一方では、〔一連の〕お悔やみ状の書き出しで χαῖρε が選ばれていることから、これらの手紙で χαῖρε は「非感情的な含意」を伴う挨拶の定式として用いられたことが推測できる（C. コツィフー「『あなたの許に来て、あなたと共に嘆き、涙を流すことができないので』パピルスに記された悲嘆と弔意」A. ハニオーティス編『感情を暴露する ギリシア世界における感情研究の資料と方法』（ハイデルベルク古代史碑文研究 52）シュトゥットガルト、

的な含意を取り上げ、それと好んで苦難を対比させます。喜びが突然驚愕すべきことに苦難と不幸に転じるのです[10]。稀にしか何か普通苦難を意味するものは喜びと結び付けられません。たとえば、ソクラテスは〔弟子の〕プラトンの〔対話篇〕『パイドン』で、肉体に縛られていることが人間に真〔実在〕(τὸ ἀληθές) を観るのを妨げている、と詳しく述べています[11]。したがってこの哲学者は「喜

2012 年〔C. KOTSIFOU, „Being Unable to Come to You and Lament and Weep with You“. Grief and Condolence Letters on Papyrus, in: A. Chaniotis [Hg.], Unveiling Emotions. Sources and Methods for the Study of Emotions in the Greek World, HABES 52, Stuttgart 2012〕、389－411 ページ［394 ページ］)。他方で、我々はお悔やみ状の中に時折 εὐψυχεῖν〔「ご息災であられますことを」〕あるいは εὖ πράττειν〔「ご清祥であられますことを」〕と〔書かれているのを〕読む ― χαίρειν はここでは（おそらく不適切なものと感じられるので）避けられている、M. トラップ編『ギリシアとローマの手紙 翻訳付き選集』ケンブリッジ、2003 年〔M. TRAPP (Hg.), Greek and Latin Letters. An Anthology, with Translation, Cambridge 2003〕、35 ページ参照。何度となく墓碑銘に挨拶の定式 χαῖρε が見られる、P. ピルホーファー『フィリピ 第二巻 フィリピの碑文カタログ』(新約聖書に関する学問的研究 119) テュービンゲン、第二版 2009 年〔P. PILHOFER, Philippi, Band 2: Katalog der Inschriften von Philippi, WUNT 119, Tübingen ^{2}2009〕、随所、また W. ピーク編『ギリシア韻文碑文 第一巻 墓碑銘』ベルリン、1955 年〔W. PEEK (Hg.), Griechische Vers-Inschriften, Band 1: Grabepigramme, Berlin 1955〕、1209－1212.1214.1216－1222 番参照。喜びはしかしまた ― 他人の不幸を喜ぶものの意味で ― 否定的な含みを持つこともできる。プラトン『ピレボス』48b.49d.c；アリストテレス『修辞学』2,5（1386b 34－1387a 3 と 1388a 23－25)、そして D. ラコース マンタヌ「喜劇的感情 破廉恥と妬み（他人の不幸を喜ぶこと)、緩和された感情」同編『古典古代における感情、文学類型そしてジェンダー』ロンドン、2011 年〔D. LACOURSE MUNTEANU, Comic Emotions. Shamelessness and Envy (Schadenfreude); Moderate Emotion, in: ders. (Hg.), Emotion, Genre and Gender in Classical Antiquity, London 2011〕、89－112 ページ（特に 95－97 ページ）参照。

10　O. ミヒェル「喜び」『古代およびキリスト教百科事典』8 巻、1972 年〔O. MICHEL, Art. Freude, RAC 8 (1972)〕、348－418 欄（350 欄)。以下のものを参照するだけで良い。ソポクレス『オイディプス王』（オイディプスはテーバイの王となるが― そうなると彼が自分の父を殺し、母と結婚したことが明らかとなる)、アイスキュロス『アガメムノン』（トロイの勝者たちは恐ろしい嵐にもかかわらず帰還することができたが― そこで彼をその妻が殺害する)、アイスキュロス『ペルシア人』（大いなる、富裕で強大な王がアテーナイ人たちによって撃ち破られる)、ヘロドトス『歴史』第 1 巻（クロイソスは〔自分が世界一〕幸せであると思っている。彼は非常に豊かで強大であったが ― そこで彼をキュロスが失脚させる)。小さな定式的な表現における〔主人公の運命の〕逆転〔περιπέτεια〕については、エウリピデス『トロイアの女たち』639－640、『タウリケのイピゲネイア』1121 参照。

11　プラトン『パイドン』66b-d。

んで」去って[12]行きます ── 彼は肉体からの分離によって愛される知に到達する希望を抱いて死んでいき[13]、白鳥たちを指し示します。白鳥は「死期を悟ると」特に力強く秀逸に鳴きます。「…なぜなら自分たちがその僕である神の御許に行くことを　喜んでいるからです。」[14]

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の中で、情念（πάθη〔πάθος パトスの複数形〕）[15]を列挙する際、喜び（χαρά）を友愛（φιλία）と並べて挙げていま

12　ἄσμενος、プラトン『パイドン』67e、さらに 68b 参照。

13　プラトン『パイドン』67e.68b.c、さらに 67a.b 参照。したがってソクラテスは、プラトンの叙述によれば、情念に囚われることなく、幸せに自らの死に向かっていくことができる。A. インゼルマン『ルカ福音書における喜び 心理学的釈義への寄与』（新約聖書に関する学問的研究第 2 シリーズ 322）テュービンゲン、2012 年〔A. INSELMANN, Die Freude im Lukasevangelium. Ein Beitrag zur psychologischen Exegese, WUNT 2/322, Tübingen 2012〕、63 ページ参照。プラトンにおける喜びについては、同書 54－78 ページ参照。

14　プラトン『パイドン』84c.85a。白鳥たちは「アポロンに属しているので、予言的である。そしてそれらは地下界の善を知っているので、歌うのであり、喜んでいるのである」（『パイドン』85b）、（翻訳は F. シュライアマハー、プラトン『パイドン、饗宴、クラテュロス』D. クルツ編、ギリシア語本文 L. ロビン／L. メリディエ校訂、ドイツ語翻訳 F. シュライアマハー、プラトン著作集、ギリシア語・ドイツ語対訳、特別版、第八巻、ダルムシュタット、1990 年〔Platon, Phaidon. Das Gastmahl. Kratylos, bearb. von D. Kurz, Griechischer Text von L. Robin und L. Méridier. Deutsche Übers. von F. Schleiermacher, Platon. Werke in acht Bänden. Griechisch und Deutsch, Sonderausgabe, Band 8, Darmstadt 1990〕）。

15　アリストテレス『ニコマコス倫理学』2,4（1105b 22）。F. ディルルマイアー〔Aristoteles, Nikomachische Ethik. Übers. und komm. von F. Dirlmeier, Aristoteles Werke in Deutscher Übersetzung 6, Darmstadt [9]1991, 34〕は、「非理性的な興奮」„irrationale[n] Regungen“と訳している。πάθη をアリストテレスは同所で、魂の中に起きる出来事に数え上げている。情念〔Pathe〕としてアリストテレスがこの文脈で挙げているのは、「欲望、怒り、不安、勇気、妬み、喜び、愛、憎しみ、憧憬、悪意、憐れみ、そして一般に快楽と苦痛が伴うものすべて」である（1105b 21－23、翻訳は O. ギゴン、アリストテレス『ニコマコス倫理学 ギリシア語・ドイツ語対訳』O. ギゴン訳、R. ニッケル編、トゥスクルム文庫、デュッセルドルフ、2001 年〔O. Gigon, Aristoteles, Die Nikomachische Ethik, Griechisch-deutsch, übers. von O. Gigon, neu hg. von R. Nickel, Sammlung Tusculum, Düsseldorf 2001〕）。

す。情念は（アリストテレスの定義に対応して）[16]快楽（ἡδονή）と苦痛（λύπη）に伴われます[17]。人生の究極の目標（τέλος）はアリストテレスにとって、しかしながら喜びではなく、幸福〔Eudaimonie〕です[18]。それに反してエピクロスにとっては究極の善は、苦痛（πόνος〔労苦〕、より頻繁には ἀλγηδών〔苦〕）に対置される快楽（ἡδονή）です[19]。「本来の目標（τέλος）としての」[20]快楽（ἡδονή）

16　アリストテレス『修辞学』3,1（1378a 20－23）、『エウデモス倫理学』2,2（1220b 13－14）、『大道徳学』1,7（1186a 13－14）。アリストテレスはある意味でプラトンに従っているように見える。プラトン『ピレボス』47d－50d 参照。その際、ἡδονή と λύπη の意味は「快楽」と「苦痛」の範囲を超えている。前者を J. M. クーパー『理性と感情 古代の道徳的心理学と倫理的理論』プリンストン、1999 年〔J. M. COOPER, Reason and Emotion. Essays on Ancient Moral Psychology and Ethical Theory, Princeton 1999〕、416 ページは「何かを能動的に楽しみ味わうこと」、後者を「真理的な混乱」と敷衍し、次のように結論づける。すなわち、ἡδονή と λύπη は「ストア派の叙述で…興奮（*ptoia*）、収縮と弛緩（*sustolē* と *dachusis*）、高揚と落ち込み（*eparsis* と *ptōsis*）、卑下（*tapeinōsis*）、そして心痛（*dēxis*）といった用語でカバーされるのとほとんど同じ機能を果たしている。」

17　似たように対比的にエピクロスは ἡδονή と πόνος を用いる。

18　アリストテレスは幸福を『エウデモス倫理学』2,1（1219a 38－39）で「完成された立派さ（徳）の意味での完成された生の活動」と規定している。幸福について『ニコマコス倫理学』10,6（1176a）－10.9（1179a）をも参照。

19　出隆、岩崎允胤訳『エピクロス：教説と手紙』岩波書店、1959 年、「教説」〔Epikur, Ratae Sententiae〕3－4；ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝（下）』岩波書店、1994 年〔Diogenes Laertius〕、10,34.131。永田康昭、岩崎務、兼利琢也訳『キケロー選集〈10〉哲学Ⅲ ― 善と悪の究極について』岩波書店、2000 年〔Cicero, fin.〕、1,29.57 参照。幸せな人生の根源かつ目標としての快楽についてはディオゲネス・ラエルティオス 10,128－129 および（エピクロス派について）キケロー『究極』1,29－30 参照。後二者について E. ホフマン「エピクロスの生の喜び」E. ファルケンベアク編『文化哲学および法哲学論集』G. ラートブルッフ記念、ハイデルベルク、1948 年〔E. HOFFMANN, Epikurs Lebensfreude, in: E. Falkenberg (Hg.), Beiträge zur Kultur- und Rechtsphilosophie (FS G. Radbruch), Heidelberg 1948〕、7－20 ページ（11 ページ）参照、「究極の快楽を感じるということは…すなわち、苦痛なしであることを意味する。」

20　ディオゲネス・ラエルティオス 10,137。ここと以下のディオゲネス・ラエルティオスの訳は O. アーペルト訳・編『ディオゲネス・ラエルティオス、哲学者列伝』ハンブルク、第三版 1990 年〔Diogenes Laertius, Leben und Meinungen berühmter Philosophen, übers. und hg. von O. Apelt, Hamburg ^{3}1990〕による。エピクロスは、A. ボンヘッファー『エピクテトスとストア ストア派哲学の研究』シュトゥットガルト、1890 年〔A. BONHÖFFER, Epictet und die Stoa. Untersuchungen zur stoischen Philosophie, Stuttgart 1890〕が強調しているように、情念〔Pathos〕としての ἡδονή ではなく、感覚的な快楽を念頭に置いている。

の証拠としてエピクロスに役立つのは、「生物がその誕生の時から快楽と共に最上の足場に立ち、苦痛に対してはしかし自然な、そして考察によってはじめて規定されたのではない忌避を感じる」[21]、そうです、私たちがまったく自発的に苦痛を避ける[22]、という事態です。彼は快楽（ἡδονή）を一方では魂の平安と苦痛のない状態（ἀταραξία と ἀπονία）── すなわち平穏に快楽を覚える様態 ── と規定しています。それらは、欠如を表す接頭辞 ἀ が示しているように、否定的に規定されています[23]。他方でエピクロスは快楽を喜び（χαρά）と上機嫌（εὐφροσύνη）[24]と規定しています。これは突き動かされて快楽を覚える様態です。ここに私たちは肯定的な感情の間に〔以下のような〕区別を見出します。

21　ディオゲネス・ラエルティオス 10,137。

22　ディオゲネス・ラエルティオス 10,137。ストア派のポセイドニオスにおいても我々は ― クリュシッポスとの批判的な論争において ― 喜びは自然に苦労から逃げることを含意しているという見解を見出す。「なぜなら教えられることができずとも、幼子たちは皆思わず、喜び（ἡδονάς）を享受し、苦労（πόνους）から身を逸らす」（R. ニッケル『ストアとストア派　第 1 巻 ギリシア語・ラテン語・ドイツ語 断片および証言選集翻訳と解説』トゥスクルム文庫、デュッセルドルフ、2008 年〔R. NICKEL, Stoa und Stoiker, Band 1, Griechisch-lateinisch-deutsch. Auswahl der Fragmente und Zeugnisse, Übersetzung und Erläuterungen, Sammlung Tusculum, Düsseldorf 2008〕、581 番［623 ページ］、さらに 1260 番参照）。

23　ἀπονία は身体に、ἀταραξία は魂に関連している。

24　ディオゲネス・ラエルティオス 10,136（喜びと上機嫌はつまり「運動的な活動」と看做されている、A. A. ロング／D. N. セドレイ『ヘレニズム哲学者 本文と注解』K. ヒュルザー訳、特別版、シュトゥットガルト、2000 年〔A. A. LONG / D. N. SEDLEY, Die hellenistischen Philosophen. Texte und Kommentare. Übers. von K. Hülser. Sonderausgabe, Stuttgart 2000〕、21 ページ R 参照）、そしてそれについてボンヘッファー『エピクテトス』（注 20 を見よ）294 ページ参照。喜びと上機嫌はいずれも魂に関連づけられている。身体に関連づけられているのがここでは飲食である。エピクロスはキュレナイカ学派と特に、後者は「苦痛の欠如」を快楽に十分とは看做さず ―「ただ運動と結び付いた快楽のみ」（ディオゲネス・ラエルティオス 10,136）を考えていた、という限りで意見を異にしている。キュレナイカ学派は身体的苦痛を精神的なものより悪いと見ていたが、エピクロスは精神的なものの方が、「現在のことのみでなく、過去のこと、そして将来のことによっても」惹き起こされるので、より悪いと考えていた（ディオゲネス・ラエルティオス 10,137）。

ἡδονή 快楽			
ἀταραξία 魂の平安	ἀπονία 苦痛のない状態	χαρά 喜び	εὐφροσύνη 上機嫌
平穏に快楽を覚える様態		突き動かされて快楽を覚える様態	

ストア思想は無情念〔Apathie 情念に囚われない境地〕という理想を主張します。それは情欲（ἐπιθυμία）と恐れ（φόβος）に並べて快楽（ἡδονή）と悲しみ（λύπη）を四つの主要な情念[25]に数えます。後二者は現在に、前二者は将来に関連づけられます[26]。

情念（πάθη）は魂の自然に反する興奮状態[27]として否定的に評価され、無情念の理想に沿って、根絶されるべきものです。その際、無情念は「あらゆる種類の苦境を克服するための戦略」[28]と理解されることができます。

しかし、やがてストア派の中で人は、喜びという肯定的な情念を強調し始めます。クリュシッポスはゼノンやクレアンテスと違ってよりきめ細かに語ります[29]。χαίρειν「喜ぶ」で彼は理性に従う情念を、ἥδεσθαι「楽しむ」で理性に逆らう情念を表しています[30]。したがって χαρά「喜び」はクリュシッポスでは肯定的な含みを持っていて ── それは克服されるべき πάθη「情念」には属して

25　γενικὰ πάθη、『初期ストア派断片集』3 巻〔SVF III〕、断片 386－388.391－394 参照。

26　『初期ストア派断片集』3 巻〔SVF III〕、断片 386＝アリストテレス『ニコマコス倫理学』p.45,16 に保存されているアスパシウスの断片参照。「ストア派の者たちは…情念は善と悪の表象に基づいて成立する、と言った。魂が、善が存在するという想定によって突き動かされると、快楽（ἡδονή）が存在し、悪が存在するという想定によって突き動かされると、悲しみ（λύπη）が存在する。また、期待される善に基づいて情欲（ἐπιθυμία）が起こり、善と見えるものに欲求が生じるが、期待される悪に起こる情念は恐れ（φόβος）である、と言っていた」（翻訳はニッケル『ストア』［注 22 を見よ］、783 番）。M. ポーレンツ『ストア ある精神運動の歴史』ゲッティンゲン、第七版 1992 年〔M. POHLENZ, Die Stoa. Geschichte einer geistigen Bewegung, Göttingen [7]1992〕、148 ページ、さらに後述注 166 の一覧表参照。

27　そう考えているのがゼノン、『初期ストア派断片集』1 巻〔SVF I〕、断片 205。

28　ニッケル『ストア』（注 22 を見よ）994－1009 番（1000 番）。

29　ミヒェル「喜び」（注 10 を見よ）356－357 欄。

30　ミヒェル「喜び」（注 10 を見よ）357 欄。

おらず、εὐπάθειαι「良い情念」に属しているのです[31]。クリュシッポスの喜びと快楽の区別は後代のストア派の教説にとっても決定的です[32]。特にセネカがそうで、彼は肯定的な含みのある〔内面的な〕喜び（*gaudium*）を否定的に評価された享楽（*voluptas*）から際立たせています。前者は徳目に、後者は悪徳に分類されています[33]。喜びと心痛、*gaudium* と *dolor* は互いに関連づけられます。たしかにセネカによれば喜びと心痛の間には区別が存在しますが[34] ―― それにもかかわらずそれらは同一の平面に立っているのです[35]。両者 ―― 喜び（*gaudium*）と心痛（*dolor*）―― が徳（*virtutes*）に関連づけられています。その限りでそれらの間に区別は存在しません[36]。

真の喜び（*gaudium*、*laetitia*）はセネカによれば外面に求められるべきではなく[37]、人間自身のうちにあります[38]。それは一つの「真剣な事柄」です（*uerum*

31　ミヒェル「喜び」（注 10 を見よ）357 欄。

32　ストア派の者たち一般について、ディオゲネス・ラエルティオス 7,116 参照、「喜び（χαρά）は、と彼らは言う、理性の前に良しと正当化されている一つの感情の高まりとして快楽（ήδονή）とは対立している…」（翻訳は O. アーペルト）。しかしながらストア派の者たちはその語法において常に首尾一貫しているわけではないように思われる。時折彼らは ήδονή を χαρά の上位概念としても用いている。ボンヘッファー『エピクテトス』（注 20 を見よ）、293-294 ページ参照。

33　セネカ『恩恵について』4,2,4、『書簡』23,5－6、そして以下。

34　セネカ『書簡』66,19。人は「一方を追い求め、他方を避ける」であろう。

35　「…同じ平面に立っているのが、適度に喜ぶことと適度に心痛を感じることである（*in aequo est moderate gaudere et moderate dolere*）」（セネカ『書簡』66,29）。

36　セネカ『書簡』66,14。

37　〔もし仮に外に求めるならば〕それは、人がその喜びを「他の力の下に置いた」ということを意味することになってしまう（セネカ『書簡』23,2、さらに『書簡』72,4、124,24 参照）。人間の外に横たわっている上機嫌（*hilaritates*）になる切っ掛けというのは「心を満たすものではなく、それらは額の皺を伸ばすだけで無意味である。というのはあなたは、笑っている者は喜んでいる、と考えなければならなくなるから」（セネカ『書簡』23,3、翻訳はローゼンバッハ〔M. Rosenbach (Hg.), Seneca, Philosophische Schriften, 5 Bde Darmstadt 2010〕）。

38　セネカ『書簡』23,3.5－6。セネカは『書簡』23,5－6 で大衆の表面的な喜び（voluptas）に、「あなた自身からの」喜び（de tuo gaude）に存する根底的な喜びを対比させている。この de tuo を彼は「あなた自身とあなた自身の最良の部分からの」（喜び）と説明している。ここに *gaudium*〔内面的な喜び〕と *voluptas*〔外面的な享楽〕の決定的な違いがある。すなわち、前者（時折 *laetitia*〔外に現れる喜び〕とも表現される）は我々と我々自身の中から生じ、従って外的な影響の力にはよらない状態であるのに対して、*voluptas* の起源は「我々の外にあり、その現存について我々が確信を持てない対象にある」（M. フーコー「自己への配慮」同著、田村俶訳『性の歴史』第 3 巻、新潮社 1987

gaudium res seuera est〔真の喜びは真剣な事柄である〕)。そしてそれは「くつろいだ朗らかな表情で死を軽蔑し、貧しい者に自分の家を解放し、享楽にしっかり手綱を付けて抑制し、苦痛に忍耐強く耐えることを塾考している」[39]人にだけ見出すことができます。「それらのことを自分自身で思い巡らし」そして、どこに喜び（*gaudium*）が由来するのかを悟った人だけが、「大いなる喜びの中に生きている（*in magno gaudio est*）」のです（セネカ『書簡』23,4）。その際、真の喜びを獲得するのは、賢者自身です[40]。

1.2　旧約・ユダヤ教の文脈[41]

人間の生の喜び[42]は祭儀的な祝祭の喜び[43]に高められます。礼拝の喜びは現在

年〔M. FOUCAULT, Die Sorge um sich, übers. von U. Raulff und W. Seitter, M. Foucault, Sexualität und Wahrheit, Band 3, Frankfurt a. M. [4]1995 [1989] 〕、ドイツ語版 91 ページ)。したがって〔voluptas で〕扱われているのは、「取り上げられる恐れによってその土台を掘り崩され、〔求めつつも〕満足が得られない可能性がある欲求の力で追及される、厄介な喜びである」(フーコー「配慮」91 ページ)、さらにセネカ『書簡』72,4 参照。

39　ミヒェル『喜び』(注 10 を見よ)、361 欄によるセネカ『書簡』23,4 の敷衍。

40　セネカ『書簡』59,14－18、特に 59,16 をも参照。「喜ぶことはできない、勇敢な者でなければ、正しい者でなければ、自制している者でなければ。」さらにコンツェルマン「χαίρω」(注 8 を見よ) 356 ページ、28－30 行参照。— 外的な状況との付き合い方については、エピクテトスが『語録』〔『語録 要録』鹿野治助訳、中央公論社、2017 年〕2,5,18－23 でソクラテスの模範を指摘している。すなわち、投獄、追放、毒杯、妻を失うこと、等々を人（哲学者）は、巧みな球技選手のようにあしらうべきである。ボールを補って、それに縛られることなく、投げることが肝要である。そのことに成功すれば、観客は彼を賞賛し、彼と共に喜ぶだろう（ἐπαινέσει καὶ συνησθήσεται)。なぜなら、その喜びに根拠がある（理性的である）なら、(それはまた) 共に喜ぶことで（も）あるから（ὅπου γὰρ τὸ χαίρειν εὐλόγως ἐκεῖ τὸ συγχαίρειν、エピクテトス『語録』2,5,23)。（真の）喜びはつまりエピクテトスでは、苦難に直面していても、模範的な振舞いを共に体験することで得られる共に喜ぶことの中に見出される。

41　ここでは私はいくつかの点に言及するにとどめる。

42　食べること（コヘ 3,13)、飲むこと（士 9,13)、音楽（創 31,27、嘆きも参照、イザ 24,7－9)、婚宴（雅 3,11b）と娶ったばかりの妻（申 24,5)、子ども、回復と交わり（トビ 10,13; 11,15.16）等々。この点と以下に関しては G. タイセン著、大貫隆訳『原始キリスト教の心理学 — 初期キリスト教徒の体験と行動』新教出版社、2008 年〔G. THEISSEN, Erleben und Verhalten der ersten Christen. Eine Psychologie des Urchristentums, Gütersloh 2007〕、246－251 ページ参照。シラ 30,21－22 では、εὐφροσύνη καρδίας「心の喜び」が λύπη「悲しみ」と対比されてこう語られる。「心の喜びは人の命を意味する」(翻訳は『ドイツ語版七十人訳 ギリシア語旧約聖書ドイツ語訳』W. クラウス／M. カラー編、シュトゥットガルト、2009 年〔Septuaginta Deutsch. Das griechische Alte Testament in deutscher Übersetzung, hg. von W. Kraus und M. Karrer, Stuttgart 2009〕による)。

のものとして体験される神の近さによって支えられています[44]。同時にそれは共同体の喜びです。それはつまり垂直と水平の関係の喜びなのです。捕囚期前の預言的伝統、特にホセアにおいては、この祭儀的な喜びが内実を失うと鋭く批判されることも可能で、異教の祭儀行為と同列に置かれることもあり得ます。「イスラエルよ、喜ぶな、異邦諸民族のように歓喜するな」[45]。特に捕囚期・捕囚期後、そして中間時代の諸テクストでは、私たちは現在の苦難は（神の介入の結果）将来の喜びに取って代わられるという表象に出会います[46]。将来に待望されている喜びは時折すでにまた苦難に満ちた現在をも規定することがあり得ます[47]。たとえば、黙示的な待望に基づいてシリア語バルク黙示録52,6-7

43　典拠は R. E. バックヘルムス『新約聖書全般および特にその資料における宗教的喜び』フリブール、1963 年〔R. E. BACKHERMS, Religious Joy in General in the New Testament and Its Source in Particular, Fribourg 1963〕、20-21 ページ。

44　聖所で体験された神の近さをテーマにしている詩編参照、詩 43,3-4; 73,17.28; 118,15。神を喜ぶことについてはさらにイザ 12,6; 61,10 参照。神の近さはまた律法の研究によっても体験することができる。後代の、特に申命記史家的、知恵文学的な特徴のテクストは律法を喜ぶことについて語っている（詩 1; 19,9; 119,14.24.47.70.77.111.117.174 参照）、それは知恵を喜ぶことと変化した形にもなる（シラ 4,18）。ラビ文献についてはさらに、バビロニアタルムード・ベラホート 31a; シャッバト 30b; ペサヒーム 117a の神の御心に適った行いをきっかけとする喜びを参照。

45　ホセ 9,1。

46　詩 126,5; イザ 29,19; 35,10; 51,11; 61,7; エレ 33,11; ゼカ 8,19 他多数参照。またトビ 13,14「…お前の懲らしめすべてのゆえに悲しむ者たちは幸いだ。なぜなら、彼らはお前を喜び、お前の喜びすべてをとこしえに見るであろう」（翻訳は B. エゴ『トビト書』ヘレニズム・ローマ時代のユダヤ教文書 II/6、ギュータースロー、1999 年〔B. EGO, Buch Tobit, JSHRZ II/6, Gütersloh 1999〕、997 ページによる）。さらに（共同体、光の子らないし契約の子らを念頭に）クムラン第一洞窟出土『戦いの書』〔1QM〕1,8-9; 13,16; 14,4; 17,6-9 他多数参照。― 後代になるとラビたちは現在における不完全な喜びと将来における完全な喜びについての教えを発展させた。「この世における我々の喜びは完全ではない。しかし将来、我々の喜びは完全なものとなるであろう」（ペシクタ 29［189a.b］）。タイセン『心理学』（注 42 を見よ）、248 ページ参照。― この点と以下に関しては特に、H. ミラウアー『恵みとしての苦難 第一ペトロ書の苦難の神学に関する伝承史的研究』（ヨーロッパ大学叢書・神学 56）フランクフルト、1976 年〔H. MILLAUER, Leiden als Gnade. Eine traditionsgeschichtliche Untersuchung zur Leidenstheologie des ersten Petrusbriefes, EHS.T 56, Frankfurt a. M. 1976〕167-179 ページ参照。

47　特に詩編の歌い手を祭儀において満たす神の救いの現臨の確信に基づいて（詩 16, 8-10）。詩 16 は祭儀的な体験の表出であるかもしれない。そう考えるのが、F.-L. ホスフェルト／E. ツェンガー『詩編Ⅰ 詩 1-50』、ヴュルツブルク、1993 年〔F.-L. HOSSFELD / E. ZENGER, Die Psalmen I. Psalm 1-50, Würzburg 1993〕、108 ページ。この詩編は捕囚期後である（同書 109 ページ、M. エーミング『詩編の書 詩 1-41』（新シュトゥットガルト注解新約 13/1）シュトゥットガルト、2000 年〔M. OEMING, Das Buch der Psalmen.

でこう言われるように。「あなた方［義人たち］は、今被っている苦難を喜びなさい。なぜなら、どうしてあなた方は自分たちの敵どもが滅びていくのを待ち受けているのですか。あなた方の魂を、あなた方のために準備されていることに向けて整えなさい。そしてあなた方の魂を、あなた方のために置かれている報酬のためにふさわしく整えられたものとせよ」[48]。

Psalm 1－41, NSK.NT 13/1, Stuttgart 2000〕、119 ページ参照)。ラビ文献、特にタンナーイーム時代からのものの中に、我々は苦難にもかかわらず〔与えられている〕現在の喜びという伝統的主題も見出す(ミラウアー『苦難』[注 46 を見よ]、169－173 ページ)。現在における喜びは、来るべき世では完全で、永遠の喜びにおける生を結果としてもたらすであろう — 償いと解釈された — 苦難によって動機づけられている。メヒルタ『出エジプト記』20,23 (79[b])（H.-L. シュトラック／P. ビラーベック『タルムードとミドラーシュからの新約聖書注解』第 2 巻、ミュンヘン、第二版 1956 年〔H.-L. STRACK / P. BILLERBECK, Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch, Band 2, München [2]1956〕、277 ページ）、W. ヴィヒマン『苦難の神学 後期ユダヤ教における苦難解釈の一形態』（旧新約学への学問的寄与 4/2）シュトゥットガルト、1930 年〔W. WICHMANN, Die Leidenstheologie. Eine Form der Leidensdeutung im Spätjudentum, BWANT 4/2, Stuttgart 1930〕、59－61 ページ、ミラウアー『苦難』（注 46 を見よ）、170 ページ参照。W. ナウク「苦難における喜び 原始キリスト教の迫害伝承の問題に寄せて」『新約学雑誌』46 巻、1955 年〔W. NAUCK, Freude im Leiden. Zum Problem einer urchristlichen Verfolgungstradition, ZNW 46 (1955)〕、68－80 (76－77) は、ヤコ 1,2.12; 1 ペト 1,6; 4,13; マタ 5,11－12; ルカ 6,22－23 を念頭に、新約聖書においてはキリスト教の χαρά「喜び」と ἀγαλλίασις「歓喜」は第一にキリストに根拠を置いており、第二に「苦難の後に待っている報酬を目掛けた喜びであるだけでなく、…キリストへの信仰において受け取られた救いについての喜び［であり］、そこでは将来の報酬がすでに現在のものとなっている」ということを明らかにしている。

48　翻訳は A. F. J. クリーン『シリア語バルク黙示録』（ヘレニズム・ローマ時代のユダヤ教文書 V/2）ギュータースロー、1976 年〔A. F. J. KLIJN, Die syrische Baruch-Apokalypse, JSHRZ V/2, Gütersloh 1976〕、157 ページによる。ミラウアー『苦難』（注 46 を見よ）、172 ページ、はこの文脈を考察して、シリア語バルク黙示録 52,6－7 で扱われているのは苦難についての喜びではなく、この箇所には苦難が償いをもたらすという表象が背景に立っており、「苦難ではなく、救いの確信が」喜びの原因である、という結論に達している。

クムラン第一洞窟出土『感謝の詩編』（1QH 3,21－23）にも、聖なる残りのものの選びについての歓喜と並んで、苦難が立っている — 扱われているのは「苦難にもかかわらず〔与えられている〕…喜び、それはその根を苦難自体の中には持っていない」（ミラウアー『苦難』（注 46 を見よ）、173 ページ）、1QH 11,3－14.15－33 参照。ユダヤ教のテクストの中には稀にしか、それ以上に踏み出して、苦難自体を肯定的に評価する発言は見られない。2 マカ 6,30 ではエレアザルは自分の最期を前にして嘆息する。「主には…知られている。私は死を逃れることもできたが、鞭打たれ、過酷な肉体的苦痛を耐えている。しかしながら、それを主を畏れ、私の魂において、喜んで（ἡδέως）甘んじて受けているのだ。」4 マカ 9,28b.29.31、ミラウアー『苦難』（注 46 を見よ）、173－175 ページ参照。

ストアにおけるように、賢者はフィロンによれば（真の）喜びを「自らの周りの事物にではなく」「自分自身のうちに」見出します[49]。しかしながら人間には、ストアとは異なり、喜びは与えられます[50]。神お独りに喜びは属しています[51]。すなわち、神のみに純粋で、混じり気がなく、対立から完全に自由な喜びは留保されているのです[52]。それと並んで、「それから流れ出たもの、混じっ

49　フィロン『劣悪』〔det.〕137（アレクサンドリアのフィロンの翻訳はこの論文ではすべて L. コーン他編『アレクサンドリアのフィロン ドイツ語訳著作集』全 7 巻、ベルリン、第二版 1962－1964 年〔L. Cohn u. a. [Hg.] Philo von Alexandrien. Die Werke in Deutscher Übersetzung, Bände 1－7, Berlin ²1962－1964〕による）。

50　フィロン『寓意』〔leg. all.〕3,219、「魂の中に幸せ（τὸ εὐδαιμονεῖν）の種を蒔き、生み出す」のは「主」である。フィロン『変化』〔mut.〕156、「被造物は悲嘆の表情を浮かべるべし ― 自然的には、なぜならそれは自分からは不安定で苦痛に満ちているから ―。しかしそれは神によって立て直され、笑うべし。なぜなら支えるものと喜びはこのお方のみであるから。」異なるのがフィロン『報賞』〔praem.〕31 で、そこではフィロンはイサクについてこう書いている。「信頼の次に、生まれつき〔備わっているの〕で塵にまみれて格闘することなく徳を獲得し、勝ち取った者に、報賞として置かれているのが喜びである…。」さらにフィロン『相続人』〔her.〕2,7 参照。フィロンにおける律法を行う際の喜びについては、H. A. ウォルフソン『フィロン』ユダヤ教、キリスト教そしてイスラム教における宗教哲学の基礎 2、ケンブリッジ、第二版 1948 年〔H. A. WOLFSON, Philo. Foundations of Religious Philosophy in Judaism, Christianity, and Islam, Band 2, Cambridge ²1948〕、224-225 ページ参照。

51　„*… soli divinae naturae proprium est gaudere*“「…喜ぶということは神の性質のみの所有物である」（フィロン『創世記問答』〔quaest. in Gen.〕4,19）。フィロン『律法各論』2,51－53〔spec. leg.〕におけるモーセの、祝祭の喜びは神のみに属しているという確言を参照。「なぜなら我らの種族の悲しい怯えた性格を計算に入れると、またそれは、一方では魂の貪欲が生み出し、他方では身体の疾患が生み出し、運命の変転と共にいる者たち同士の争いが能動、受動で増し加えるところの無数の災いに満たされているのであるから、（これらすべてに鑑みて）彼（モーセ）は正しくも問うたのであった。果たして誰か、これほどの自発的および自発的でない事柄の大海で翻弄され、決して平穏無事になることなく、危険のない人生の港にしっかりと錨を下ろすこともないような者が、そう言われているだけでなく事実真理に向かうものである祭を挙行することができるだろうか、世界とそこにある事物についての観照と、自然に従うことと、言葉の行いに対する、そして行いの言葉に対する調和とに喜び耽りつつ、と」（フィロン『律法各論』〔spec. leg.〕2,52）。

52　プラトンは純粋な喜びを感覚的な情念と混ざっていない喜びとして規定しようとした。プラトン『ピレボス』および H.-G. ガダマー『プラトンの弁証法的倫理 ピレボスの現象学的解釈』ハンブルク、（1931 年）1983 年〔H.-G. GADAMER, Platos dialektische Ethik. Phänomenologische Interpretationen zum Philebos, Hamburg (1931) 1983〕、151－153 ページ、L. シュタイガー「喜び II」『神学百科事典』11 巻、1993 年〔L. STEIGER, Freude II, TRE 11 (1993)〕、586－589 ページ（588 ページ、15－18 行）参照。

た、幾分か苦難が入った喜び」があります。「そして賢い者は最大の贈り物としてそのような混合物を受け取ります。そこには快適なものが不快なものよりも多く含まれているのです」[53]。ストアにおいては喜びは現在に関連づけられているのに対して、喜びはフィロンの場合、現在と同様将来にも関連しています[54]。

1.3　ギリシア・ローマの友愛思想

「喜び」は古代の友愛の主題群の中に出てきます。ここでは喜びの社会的な側面が現れます。ソクラテスはクセノフォンによれば、友愛について詳しく述べる中で[55]以下のように断言します。「そして［善い友は］うまく行っている場合には最も喜び、転んでいる場合には立て直すのである。」[56]これとよく似て

53　『律法各論』〔spec. leg.〕2,55、翻訳はコーン他編『フィロン　ドイツ語訳』第 2 巻（注 49 を見よ）、強調は筆者、P. von Gemünden。

54　『報賞』〔praem.〕32;『劣悪』〔det.〕120。『変化』〔mut.〕163 ではフィロンは希望を「喜びの前の喜び」と理解している。すなわち、「フィロンは希望を事前の喜びだとすることによって喜びを現在すでにそこにあるものとこれから来るべきものとに二重化する」（タイセン『心理学』［注 42 を見よ］、250 ページ）。フィロンの場合、旧約（箴 15,21）および異教の文学におけるように「喜び」の肯定的な含意と並んで、また愚か者の喜びもある。

55　クセノフォーン『ソークラテースの思い出』佐々木理訳、岩波書店、1974 年〔Xenophon, mem.〕、2,4,6－7。「（6）なぜなら善い友はその友のあらゆる不足のために自分自身を用立てる。自身の財産を整えることでも、公共の事柄でも。何か慈善をする必要がある場合にも協力するし、何か恐れが心を乱す場合にも、共に助けに駆けつける。資金援助をしたり、協力したり、共に説得に当たったり、実力で突破したりしながら。そしてうまく行っている場合には最も喜び、転んでいる場合には立て直すのである。（7）そして両手が各自のために下働きをし、両目が先立って見、両耳が先立って聞き、両足が道を踏破する限りのこと、これらの何一つとして人を援ける友は欠くことはない。しばしば自分自身のために成し遂げられなかったことや、見なかったことや、聞かなかったことや、踏破しなかったこと、これらのことを友はその友のために十分してくれているのである。しかしながらある者たちは実のゆえに樹を世話しようと試みるのだが、全ての実りをもたらす、友と呼ばれる、財産のことは、大多数の者たちが怠惰で無思慮に扱っている。」〔Xenophon, Erinnerungen an Sokrates, Griechisch-Deutsch, hg. von P. Jaerisch, Darmstadt ^{2}1977 を参考にした須藤試訳〕

56　クセノフォーン『思い出』〔Xenophon, mem.〕2,4,6。プラトンの伝統に立つプルタルコスは、「似て非なる友について」同『モラリア 1』瀬口昌久訳、京都大学学術出版会、2008 年〔Plutarch, De adulatore〕で何度も友愛と喜びの関係をテーマにしている。たとえば、『モラリア』49F にはこうある。「…友愛は、不幸において苦痛と悲哀を（λύπας καὶ ἀπορίας）鎮めるのと同様、歓喜と恵みを（ἡδονὴν … χάριν）もたらす。」さらに『モラリア』51A.B「なぜなら…友愛はあらゆるものの中で最も甘美なものであり、他の何

いるのがアリストテレスで、こう断言しています。「しかし友は、愛する者であり、その愛が応えられる者である…。このことを基盤とするなら、必然的に以下の者が友であることになる。すなわち、他のことではなく、その人のゆえに、善い事柄について共に喜び、心痛む事柄について共に苦しむ者である。なぜなら、人が欲していることが起きれば、皆喜び、逆のことがやって来れば、苦痛を感じる。その結果、苦痛と快楽を感じることは欲することの徴なのである。」[57]

一つの特別な役割を「喜び」はエピクロス派の共同体、「友」の共同体[58]において演じています。エピクロスは、キケロー『善と悪の究極について』〔Cicero, fin.〕1,67によれば、こう教えました。すなわち、「友愛は、友のためにと同様自分自身のために、快楽の最も忠実な護り手であるだけでなく、それを生み出すものである。人はそれらが現在あるのを享受するだけでなく、引き続く時、またさらに後の時の希望によって立ち上がらせられもする。…友愛は快楽と結び付けれられている（*amicitia cum voluptate conectitur*）。なぜなら私たちは友たちの喜びを私たち自身のものと同じように喜ぶし、苦悩も等しく嘆くからである。」[59]

物もそれ以上に人を喜ばせはしないから（οὐδὲν ἄλλο μᾶλλον εὐφραίνει）。」54D.E「…その歓喜に属すことは［友と追従者とに］共通している（τὸ τῆς ἡδονῆς κοινόν ἐστι）のだから。というのは、誠実な者はその友たちを、劣悪な者が追従者たちを喜ばせるのと同様、喜ばせる（χαίρει）からである。」を参照。〔プルタルコスの翻訳は Plutarch, Moralia, Band 1, hg. von C. Weise und M. Vogel, Wiesbaden 2012 を参考にした須藤試訳。〕

57　アリストテレス『修辞学』2,4 (1381b 1－8)。翻訳は、アリストテレス『修辞学』翻訳・解説 C. ラップ（アリストテレス著作集ドイツ語版 4/1）ダルムシュタット、2002 年〔C. Rapp, in: Aristoteles, Rhetorik, übers. und erl. von C. Rapp, Aristoteles. Werke in Deutscher Übersetzung, Band 4/1, Darmstadt 2002〕による。

58　エピクロス派は（ピュタゴラス派もそうであるように）お互いを「友」と呼び、またそのようなものと言い表されていた。ディオゲネス・ラエルティオス〔Diogenes Laertius〕10,9－11 参照。ピュタゴラス派についてはディオゲネス・ラエルティオス 8,10 参照。

59　„*… nam et laetamur amicorum laetitia aeque atque nostra et pariter dolemus angoribus*“, キケロー『善と悪の究極について』O. ギゴン／シュトラウメ－ツィンマーマン訳注、ミュンヘン、1988 年〔Marcus Tullius Cicero, Über die Ziele des menschlichen Handelns. De finibus bonorum et malorum, hg., übers. und komm. von O. Gigon und L. Straume-Zimmermann, München 1988〕、62－63 ページ参照。

そうです、苦難については、プルタルコスから読み取れるように、エピクロスはさらに踏み込む用意があります。すなわち、『コロテス論駁』にこう書かれています[60]。「彼［エピクロス］は快楽のゆえに（τῆς ἡδονῆς）友愛を選びつつも、友のゆえに最大の苦痛を甘受する（ἀλγηδόνας ἀναδέχεσθαι）のだ、と言う」[61]。エピクロスは「死の床にあった時」こう確言しました。（友愛から出る）喜びは「考えられる限りの限界を超える苦痛」に対して「十分釣り合いが取れるもの」となる[62]、と。

ストア的な思想素材の特徴を帯びているのがキケローの『ラエリウス 友情について』です[63]。彼は強調しています。善意の友人は人生を「生きることができる」〔vita vitalis〕ものにします。そのことについて彼は詳しく述べています。すなわち、「幸せな時に、もしそのことをあなた自身と同じように喜んでくれる人（*qui illis aeque ac tu ipse gauderet*）がいないなら、そのような喜びの享受はどんなだろうか。逆境に耐えることは、もしそれをあなた以上に重く担ってくれる人がいないなら、本当に困難なこととなるだろう。」[64]普通の、よ

60　ロング／セドレイ『哲学者』（注 24 を見よ）〔LONG / SEDLEY, Philosophen (s. Anm. 24)〕、22 ページ H＝プルタルコス「コロテス論駁」同『モラリア 14』戸塚七郎訳、京都大学学術出版会、1997 年〔Plutarch, Adv. col.〕、1111B (Usener 546)。

61　ディオゲネス・ラエルティオス 10,121 によれば、エピクロス派のやり方はそれどころか「場合によっては友のために死に」赴くことさえある。エピクロスにおける友愛については M. エアラー「エピクロス学派」H. フラシャー編『古代哲学 4 巻 ヘレニズム哲学』（哲学史概説 古代 4/1）バーゼル、1994 年〔M. ERLER, Die Schule Epikurs, in: Die Philosophie der Antike, Band 4: Die Hellenistische Philosophie, hg. von H. Flashar, Grundriss der Geschichte der Philosophie, Antike 4/1, Basel 1994〕、203－380 ページ（166－167 ページ）参照。

62　ロング／セドレイ『哲学者』（注 24 を見よ）〔LONG / SEDLEY, Philosophen (s. Anm. 24)〕、24 ページ D＝ディオゲネス・ラエルティオス 10,22 (Usener 138)。現在の苦痛に、エピクロスはつまり、過去における快楽享受の記憶によって対抗している。M. ホッセンフェルダー『エピクロス』ミュンヘン、第三版 2006 年（1991 年）〔M. HOSSENFELDER, Epikur, München ^{3}2006 (1991)〕、95 ページは「抑圧ないし重畳の一種心理テクニック」について語っている。

63　キケロー『友情について』中務哲郎訳、岩波書店、2004 年〔Cicero, Laelius. Über die Freundschaft, Übersetzung, Anmerkungen und Nachwort von R. Feger, Stuttgart 1986, 75〕参照。

64　キケロー『友情』〔Cicero, Lael.〕22、ここと以下の翻訳は R. フェーガー（注 63 を見よ）〔R. Feger (s. Anm. 63)〕による。『友情』〔Lael.〕51、「…友によって獲得される利益よりもむしろ友の愛それ自体の方が人を喜ばせてくれる（*amor ipse delectat*）」と『友情』〔Lael.〕55、「…しかしながら友によって美しくされず、打ち捨てられた人生

り劣った友愛がすでに人を喜ばせ（*delectat*）、役に立つのですから、真の完全な友愛はより一層そうなります。「なぜなら友愛は幸せをより輝かしいものにし、不幸を、分けて、共に分かち合うことによって、より軽くするのである。」[65]

交わりはプラトンとアリストテレスにおいては明確に政治的な側面を持っています。たとえばプラトン『国家』に私たちは次のように書いてあるのを読みます。「『さて快楽と悲しみの（ἡδονῆς τε καὶ λύπης）交わりは結び付けるのではないかね、もし、できる限り全ての市民が、何かが生じたり、なくなったりする度に、同じように喜び、また悲しむ（χαίρωσι καὶ λυπῶνται）ならば？』『全くその通りです』と彼は言った。」[66]

アリストテレス[67]によれば友愛は喜びを携えてきます。その際ここで区別がなされないといけません[68]。すなわち、徳のある者たちだけが他者のことを、

というものは喜ばしいものではありえないだろう（*esse iucunda*）」を参照。さて上で見たように、ストア派の見解に従えば、真の喜びは外面に求められるべきではない。このことは友の意義に対して緊張関係にあるように見える。そのことをキケローは『友情』〔Lael.〕30 で次のように書いて、否定している。すなわち、「なぜなら人は自分に自信があればあるほど、そして何も欠けることがなく、自らの所有物が自分自身の内に置かれていると判断できるほど、徳と知恵によって防御されていればいるほど、友愛を追い求め、育む点で目立つこととなるからである。」

セネカも αὐτάρκεια「自足」を賢者のものであると主張し、賢者はたしかに友なしでも生きられるが、それを望みはしない、と強調している（セネカ『書簡』9,3.5）。A. J. マルハーベ「パウロの自足（フィリ 4,11）」J. T. フィッツジェラルド編『友愛、追従、そして発言の率直さ 新約聖書世界における友愛の研究』（新約雑誌補遺 82）、ライデン、1996 年〔A. J. MALHERBE, Paul's Self-Sufficiency (Philippians 4:11), in: J. T. Fitzgerald (Hg.), Friendship, Flattery, and Frankness of Speech. Studies on Friendship in the New Testament World, NT.S 82, Leiden 1996〕、125‐139 ページ（136 ページ）をも参照。

65　キケロー『友情』〔Cicero, Lael.〕22、翻訳は R. フェーガー（注 63 を見よ）による。

66　引用の続きは、「それに対してこのような事柄の孤立化は〔結びつきを〕解体するのではないか。もし国家の、あるいはその国家のうちにいる者たちの同一の出来事に関してある者たちは深く悲しんでおり（περιαλγεῖς）、他の者たちは舞い上がって喜んでいる（περιχαραῖς γίγνωνται）なら？」（プラトン『国家』5,462b.c）。

67　政治的な側面については、アリストテレス『エウデモス倫理学』〔Aristoteles, eth. Eud.〕7,1 (1234b 22–24) 参照。

68　「如才ない者たち」は同じ領域からお返しを受け取るのに対して、「〔少年〕愛好者と愛される者の場合は」そうではない。「なぜなら、ここでは同じ体験が快楽の原因ではないからである。すなわち、一方は愛される者を見て喜ぶが、後者は愛好者に注目されることで喜ぶのである。」（アリストテレス『ニコマコス倫理学』〔Aristoteles, eth. Nic.〕8,5 [1157a 6‐8]、翻訳は F. ディルルマイアー［注 15 を見よ］）。

その人自身のために喜ぶことができますが[69]、しかしながら利益ないし快楽のために友愛に勤しんでいる者たちはそれができないのです[70]。

ディオン・クリュソストモスに私たちは個人的な側面と社会的な側面の対応を見出します。彼はこう書いています。「だが、人の人に対する、国家の国家に対する友愛と一致より美しいもの、神的なものは何もない。…人が誰か、その人と苦痛を分かち合い、それを担うのを助けてくれる時よりも、いつ心痛（λυπηρά）が少なくなるだろうか？ 幸せである時に自分自身だけでなく他者も喜ばせる（εὐφραίνουσιν）者以上に、誰に幸せはより一層甘美となるだろうか？ 少なくとも私は、共に喜んでくれる者（συνηδόμενον）を持たない人を幸せであると言うことはできないだろう。」[71]

1.4　bona cogitare「良いことを考えること」── avocatio「逸らし」と revocatio「転換」の技法

エピクロスに遡るのが、〔古典〕古代に広まっていた一つの心理教育的な方法です。すなわち、否定的なこと（悪いこと）の意味をそれから逸らして（*avocatio*）肯定的なこと（楽しいこと）へと転換する（*revocatio*）技法です。人は、とキケローはエピクロスの説を紹介します、「悩み事について思い巡らすのを避け

69　アリストテレス『ニコマコス倫理学』〔Aristoteles, eth. Nic.〕8,5 (1157a 18－20) 参照。「しかしながら自分たち自身のために〔友となることができるのは、P. フォン・ゲミュンデン〕明らかに善い者たちだけである。なぜなら、悪い者たちは、何か利益が生じない限りは、自分たち自身を喜ぶことはないからである。」（翻訳は F. ディルルマイアー［注 15 を見よ］）。

70　アリストテレスは三種類の友愛を区別している。すなわち、利益のための、ないし快楽のための（短期的な）友愛と、徳ある者たちの友のための（永続的な）友愛である。アリストテレス『ニコマコス倫理学』〔Aristoteles, eth. Nic.〕8,3－4 (1156a 6－1156b 6)。最後の範疇の説明を参照。「…徳ある者たちはしかし、互いに自分たち自身のために友である。なぜなら、彼らは、彼らが徳ある者である限りにおいて、そうであるから。」（『ニコマコス倫理学』〔eth. Nic.〕8,5 [1157b]、翻訳は O. ギゴン［注 15 を見よ］）。

71　ディオン・クリュソストモス『弁論』〔Dion Chrysostomos, or.〕41,13。『弁論』41,12 にはこうある。「なぜなら決して、と人は言うことができる、憎しみの果実は甘美ではなく、また有益でもなく、逆に他の何より不快で苦々しいものであり、敵対を担うほど、これほど困難で、厄介な重荷はない。それは諸々の幸運を常に悩まし、不幸を増し、何かを悲しんでいる者（λυπουμένῳ）にその悲しみ（λύπην）を倍にし、幸せな者たちを相応の報いに沿って喜ば（χαίρειν）せないのである。」

て…楽しいことを考えるのに集中すべきである。」[72]

そこでたとえば慰めの文学では繰り返し、身近な人を喪った悲しみに対して、あなたにはこの貴重な人物がいた…ということを喜びなさい、という警告で向き合うことが試みられます。たとえばセネカはポリュビオスにこう書いています。「喜べ、…あなたがそのように良い兄弟を持ったことを。そして彼との利益をもたらす付き合いを持ったことを。あなたが持ったものが深く幸せにするものだったことを考えよ…。[73]」ここで思考は喪失から逸らされて、肯定的なものに焦点を合わせられ[74]、悲嘆は感謝の喜びに変えられます[75]。

72　キケロー『トゥスクルム荘対談集』〔Cicero, Tusc.〕3,33: … *avocatione a cogitanda molestia et revocatione ad contemplandas voluptates*. キケロー『トゥスクルム』3,35（「なぜならエピクロスの意見によれば悪いことを考えることから気を逸らすのだという、楽しいことへのあの眼差しは虚しいものだからです」）、3,76（「他の者たちはエピクロスのように悪いことから良いことへと気を逸らす〔*qui abducunt a malis ad bona*〕」）、キケロー『善と悪の究極について』1,57 その他多数参照。P. A. ハロウェイ「良いことを考える フィリ 4,8−9 におけるエピクロス的慰め」『ハーヴァード神学評論』91 巻、1998 年〔P. A. HOLLOWAY, Bona Cogitare. An Epicurean Consolation in Phil 4:8−9, HTR 91 (1998)〕、89−96 ページ（90−91 ページ）、さらに R. カッセル『ギリシア・ローマの慰めの文学』（論究 18）ミュンヘン、1958 年〔R. KASSEL, Untersuchungen zur griechischen und römischen Konsolationsliteratur, Zetemata 18, München 1958〕参照。

73　セネカ『ポリュビウスに寄せる慰めの書』10,6。

74　そのように、再焦点化（refraiming）を我々はプルタルコス『心の平静について』〔de tranquillitate animi〕8 (469 C.D) にも見出す。そこではアリスティッポスが（三つあるうちの）一つの土地を失った後、彼を憐れもうとする友に言う。「…失なわれたものについて悲しんで、保たれたものについて喜ばない（μὴ χαίρειν）で、まるでおもちゃの中から少し取り上げると、その他の全てを投げ捨て、泣き叫ぶ幼子のように、幸運が私たちを一面で損なった時に、泣いて嘆いてその他の全てを無益なものとするのは馬鹿げている。」再焦点化をプルタルコスは少し前の『心の平静について』〔de tranquillitate animi〕8 (469 B)でこう言い表している。「さて、どうして我が友よ、…あなたはそんなにあなた自身の悪いことに目を注いで、それをそのことによって常に新たで出来立てのものにし、しかしあなたが持っている良いことにあなたの思考を向けないのか？」P. A. ハロウェイはこの技法をエピクロスに帰している（キケロー『トゥスクルム荘対談集』〔Cicero, Tusc.〕3,31.76 他多数参照）。それは〔古典〕古代において広く受容されていたものである（ハロウェイ「良いことを考える」［注 72 を見よ］92−96 ページ）。

75　セネカ『書簡』99,3、「…あなたは彼を見送ったことを悼むよりも（*quam maereres quod amiseras*）、彼を持っていたことを喜ぶように努力すべきであった（*magis gauderes quod habueras*）。」（翻訳はローゼンバッハ）とセネカ『マルキアに寄せる慰めの書』3,4 をも参照。

キケローは、エピクロスとは違って、*bona cogitare* に関して徳の真実の富に向かうことのみを受容し、快楽の偽りの富に向かうことは受容するつもりがないという限りで、エピクロスの方法を修正している。ハロウェイ「良いことを考える」［注 72 を見よ］92 ページ、注 16 参照。

さてこのようにローマのヘレニズム的周辺世界を眺めた後で、フィリピ書に向かいましょう。教会共同体にとって、そしてなお一層明確にパウロにとって、困難な状況であるにもかかわらず、目立った形で喜びのモティーフがこの手紙を貫いています。パウロはフィリピの人たちに喜ぶようにと勧め、彼自身の喜びについて書いています。フィリピの人たちの喜びとパウロの喜びは密接に関連していて、切り離すことは困難です。そうではありますが、以下で私はまず第一にパウロの詳論が読者に向けて方向付けられていることに注目し（つまり、どのようにパウロはフィリピの人たちに働きかけようとしているか、という問いです）、それから第二に著者、すなわちパウロに目を向けたいと思います（つまり、彼は自分からは何を語っているか、という問いです）。

2　フィリピ書

2.1　読者志向の視点の下でのフィリピ書

パウロとフィリピの共同体の間には非常に心のこもった関係[76]が成り立っていて、そのことがまた彼の言葉遣いにも現れています。パウロは「友愛」という伝統的主題（トポス）に属す数多くの概念を用いています[77]。これらの概念によって彼は

76　フォレンヴァイダー『フィリピ書』（注 2 を見よ）〔VOLLENWEIDER, Philipperbrief〕、2467 ページ。

77　J. T. フィッツジェラルド「友愛についてのいつくかの古代の議論に照らして見たフィリピ書」同編『友愛、追従、そして発言の率直さ』（注 64 を見よ）〔J. T. FITZGERALD, Philippians in the Light of Some Ancient Discussions of Friendship, in: ders. (Hg.), Friendship, Flattery, and Frankness of Speech (s. Anm. 64)〕、141－160 ページ（特に 144－156 ページ）、A. J. マルハーベ『道徳的勧告 ギリシア・ローマ資料集』（初期キリスト教文庫 4）フィラデルフィア、1986 年〔A. J. MALHERBE, Moral Exhortation. A Greco-Roman Sourcebook, LEC 4, Philadelphia 1986〕、14 ページ、同「自足」（注 64 を見よ）〔Self-Sufficiency〕、126－131 ページ参照。パウロは友愛の伝統的主題をおそらくヘレニズム・ユダヤ教を通して知っている。そう考えるのが H.-J. クラウク「友の交わりとしての教会？ 新約聖書における痕跡探求」『ミュンヘン神学雑誌』42 巻、1991 年〔H.-J. KLAUCK, Kirche als Freundesgemeinschaft? Auf Spurensuche im Neuen Testament, MThZ 42 (1991)〕、1－14 ページ（8－9 ページ）。

フィリピ書における「友愛」という伝統的主題の意義は、たとえフィリピ書を全体として「喜びの手紙」と性格づけることは躊躇するにせよ、争う余地がない（この S. K. ストワース「天国の政治における友と敵 フィリピ書における神学を読む」J. M. バスラー編『パウロ神学 1：テサロニケ書、フィリピ書、ガラテア書、フィレモン書』ミ

その人たちに対する友愛の関係を意識させ、それを保持し、外部からの社会的な圧力と共同体内部の緊張に直面して、それを強めようと試みています。

「喜びをもって」、とパウロはその手紙の冒頭ただちに強調します、彼はいつもフィリピの人たちのために祈りで執りなしています（フィリ 1,4）。この言い方は目立っています―たしかに祈っていますと請け合うことは普通でしたが[78]、しかしこの関連で μετὰ χαρᾶς「喜びをもって」というのはありません[79]。

ネアポリス、1991 年〔S. K. STOWERS, Friends and Enemies in the Politics of Heaven. Reading Theology in Philippians, in: J. M. Bassler [Hg.], Pauline Theology 1: Thessalonians, Philippians, Galatians, Philemon, Minneapolis 1991〕、105‐121 ページ〔119 ページ、注 45、121 ページ〕と、たとえば K.-W. ニーバー「フィリピ書 苦難における喜び」同編『新約聖書基本情報 聖書知識的・神学的手引き』M. バッハマン、R. フェルトマイアー、F. W. ホルン、M. ライン共著、ゲッティンゲン、2000 年〔K.-W. NIEBUHR, Der Philipperbrief. Freude im Leiden, in: ders. [Hg.], Grundinformation Neues Testament. Eine bibelkundlich-theologische Einführung. In Zusammenarbeit mit M. Bachmann, R. Feldmeier, F. W. Horn und M. Rein, Göttingen 2000〕、255‐262 ページ〔258 ページ〕によって主張されている分類に対して、たとえば D. E. アウネ『文学的環境における新約聖書』（初期キリスト教文庫 8）フィラデルフィア、1987 年〔D. E. AUNE, The New Testament in Its Literary Environment, LEC 8, Philadelphia 1987〕、203 ページは、大多数の初期キリスト教の、特にパウロ書簡の「『混合的』性格」を指摘している。さらにフィッツジェラルド「フィリピ書」（注 77 を見よ）〔FITZGERALD, Philippians〕142‐144 ページ、S. K. ストワース『ギリシア・ローマ古代における書簡執筆』（初期キリスト教文庫 5）フィラデルフィア、1986 年〔S. K. STOWERS, Letter Writing in Greco-Roman Antiquity, LEC 5, Philadelphia 1986〕、60 ページ、H.-J. クラウク『古代の書簡文学と新約聖書 教科書・ワークブック』パダーボーン、1998 年〔H.-J. KLAUCK, Die antike Briefliteratur und das Neue Testament. Ein Lehr- und Arbeitsbuch, Paderborn 1998〕、241 ページをも参照）。G. タイセンはパウロ書簡を友愛書簡から教会共同体書簡への様式史的発展と理解している。G. タイセン「文学史的な問題としての新約聖書の成立」（ハイデルベルク科学アカデミー哲学歴史部門報 40）ハイデルベルク、2007 年〔G. THEISSEN, Die Entstehung des Neuen Testaments als literaturgeschichtliches Problem, Schriften der Philosophisch-historischen Klasse der Heidelberger Akademie der Wissenschaften 40, Heidelberg 2007〕、103‐120 ページ参照。

78　いわゆる拝跪定式〔Proskynema-Formel〕についてはクラウク『古代の書簡文学』（注 77 を見よ）〔KLAUCK, Antike Briefliteratur〕、38 ページと M. トラップ編『手紙選集』（注 9 を見よ）〔TRAPP, Letters〕を参照。

79　P. シューベルト『パウロの感謝の様式と機能』（新約学雑誌補遺 20）ベルリン、1939 年〔P. SCHUBERT, Form and Function of the Pauline Thanksgivings, BZNW 20, Berlin 1939〕、71 ページは、しかしながら μετὰ χαρᾶς「喜びをもって」を「取るに足らない例外」と評価している。1 テサ 3,9 では感謝の言葉は χαρά「喜び」と結び付いている。εὐχαριστίαν δυνάμεθα τῷ θεῷ … ἐπὶ πάσῃ τῇ χαρᾷ ᾗ χαίρομεν δι’ ὑμᾶς …「あなたがたのゆえに喜ぶあらゆる喜びに対して、…私たちは感謝を神に〔することが〕できるだろうか」。コロ

パウロが教会共同体のために「喜びをもって」祈っているというのは、パウロ書簡の序の部分ではフィリピ書だけに見られます[80]。ここでパウロはフィリピの人たちに対する彼の深い感情的な[81]、喜びに規定されている関係を表現しています[82]。それは共に福音に与っていることに基づいています[83]。フィリピ人のための祈りと κοινωνία「共に与っていること、交わり」の強調には、神学的そして社会的に動機付けられた励ましの機能があります[84]。

1,11－12 には感謝への要請が見られる。前書きにおける喜びについては、ムネーシエルゴスの手紙、紀元前 4 世紀の最古のギリシア語書簡の一つ、の前書きをまずは参照。「ムネーシエルゴスはその家人たちに、喜び（χαίρειν）、そして健やかであることを命じる…」（S. ヴィトフスキ『プトレマイオス朝時代のパピルスに保存されているギリシア語個人書簡』（トイブナー・ギリシア・ローマ文庫）ライプツィヒ、第 2 版 1911 年〔S. WITKOWSKI, Epistulae privatae graecae quae in papyris aetatis Lagidarum servantur, BSGT, Leipzig ^{2}1911〕、135－136 ページ、翻訳はクラウク『古代の書簡文学』（注 77 を見よ）37 ページ）。

さらにフィリ 1,4 に目を向けると顕著であるのは、「読者は感謝の動詞の後に本来ならば感謝の理由を期待するもので、『喜びをもって私はそのような祈りを為している』というような繰り返しではないということである」（U. B. ミュラー『フィリピ人へのパウロの手紙』（神学袖珍注解 11/1）ライプツィヒ、1993 年〔U. B. MÜLLER, Der Brief des Paulus an die Philipper, ThHK 11/1, Leipzig 1993〕、40 ページ）。

80　1 テサロニケ書の序では μετὰ χαρᾶς は多くの患難があるにもかかわらず御言葉を「喜びをもって」受け容れたことに関連づけられている（1 テサ 1,6）。序における喜びの表現は、バルナバ書 1,2（「神のあなた方に対する義しい行いが大きく豊かであるので、私はあなた方の幸せで輝かしい霊について度を越えて大いに喜んでいる」、イグ・マグ 1,1「私は歓喜に満たされて（ἀγαλλιώμενος）イエス・キリストの信仰においてあなた方に語ろうと決めた」）、イグ・ポリ 1,1「私はあなたの傷のない顔に相応しい者とされたので、度外れて賛美する。私はそれを神にあって喜びたい（ὀναίμην）」。イグ・フィラ 1,1「［フィラデルフィア教会に］私はイエス・キリストの血において挨拶を送る。それ〔その教会〕は永遠の揺るぎない喜び［χαρά］である。」参照。

81　フィリ 1,7 をも参照。「なぜならあなた方は私の心の中に住んでいるからです…」（チューリヒ訳〔Zürcher Bibel〕）。

82　それは、古代の書簡の慣例に定着している、手紙受け取りの際の喜び以上のものである。J. ロイマン『フィリピ書 導入と注解付き新訳』（アンカーバイブル 33B）ニューヘイブン、2008 年〔J. REUMANN, Philippians. A New Translation with Introduction and Commentary, AncB 33B, New Haven 2008〕、106 ページ。「フィリ 1,4、喜びをもっては『手紙の喜び』ではなく…長期間の関係からくるフィリピの人々に対するパウロの祈りと感情へのその時の言及であり、手紙の受け取りよりも深いものである」。

83　フィリ 1,5－7。

84　P. マードック『フィリピ書』（エディション C 新約聖書注解 15）ノイハウゼン－シュトゥットガルト、1987 年〔P. MURDOCH, Philipperbrief, EdC.B 15, Neuhausen-Stuttgart 1987〕、25 ページ。「…『喜びをもって』…共同体が励まされるように」。

以下で私たちは、パウロが否定的なことを一貫して再解釈していることを観察できます。パウロは、そう推測できるのですが、彼の実存的なキリストへの根本的な決断に意味があり、価値があることを堅持し、このことを肯定的な解釈で強固にし、そして同時にフィリピの人たちに彼ら、彼女らの状況の肯定的な理解を伝え、そうしてその人たちを「この世における光〔宇宙の中の星々〕」（フィリ2,15）にしようとしています[85]。

そこでパウロは[86]、彼が投獄されたことはキリスト者の多数を強めた[87]、とフィリピの人たちに伝えます。そう、彼の目から見ると妬みと争い、つまり否定的な情念とその帰結に動機付けられている、競合関係にある伝道者たちの宣教でさえ、彼は肯定的に評価をし直します。「重要なことはただ、…キリストが宣べ伝えられているということであり、そのことを私は喜んでいる（χαίρω）[88]。」彼が置かれている困難な状況は、何ら福音から距離を取らせるものではありません。否、多数の者にとってはそれは宣教の効果を伴って信仰を深めさせることとなっている、というのです。

彼の裁判の行方が確かでないことをパウロはフィリ1,21－26で思い巡らし、次のことを明言します。すなわち、彼がひょっとしたらこの世を去ることは「キリストの許にいる」という、彼の「欲求」（快楽）に沿い、もちろん何か肯定的なことですが、彼が生き延びることはフィリピの人たちの信仰における前進と喜びに役立つのです[89]。フィリ1,25ではパウロは全くフィリピの人たちを基

85　ボアマンは（競合する）背景として特にキケロー『国家』6,13 とキケロー『友情』11－12 に典拠がある、「ローマ国家の英雄たちは…宇宙における光体」であるという表象を指摘している（ボアマン『フィリピ』［注 5 を見よ］〔Bormann, Philippi〕、219 ページ、注 38）。光を担うものの表象はしかしすでにまたダニ 12,2、4 マカ 17,5、マタ 5,14 にも出てくる。遺ベンヤミン 6,4 によれば主は（善い人の）善い心の中に住み、「彼の魂を照らす。すると彼は全ての人に対していつも喜ぶ」。

86　フィリ 1,12「さて、兄弟姉妹たちよ、あなた方は知っていてほしい、…（Γινώσκειν δὲ ὑμᾶς βούλομαι …）」。

87　「兄弟姉妹の多数は私の投獄によってその主への信頼を強められ、今やなお一層決然と、御言葉を恐れることなく語ることを敢えてするようになったのである」（フィリ 1,14、チューリヒ訳）。

88　フィリ 1,18a（チューリヒ訳）。

89　他者への方向付けを獄中のキケローも『弟クィントゥス宛書簡』〔Cicero, ad Quintum fratrem〕1,3,1.5 で示している。すなわち、彼は自らが生か死かの選択の前に立たされていると見ているのであるが、〔普通であれば〕第二のものをより好むであろうところであるにもかかわらず、自分の弟のために生の方に決断する。「キケローは彼の選択を

準に方針を決めています。その人たちの信仰における喜びが彼の価値判断には決定的なのです[90]。

自分がひょっとしたら殉教の死を遂げることさえ、パウロは肯定的に解釈することができます。たとえ彼がその命をフィリピの人たちの信仰のための「犠牲供儀」において捧げなければならないとしても[91]、それはパウロにとっては喜びのきっかけとなるでしょう（χαίρω フィリ2,17）。パウロはここで ── そのように文脈（フィリ2,15-16）から推論できるのですが[92] ── 自分の起こりうる殉教死についてではなく、フィリピの人たちの信仰について喜んでいます[93]。

自分自身の好みに基づいてではなく、自分の弟クィントゥスにとって何が必要であり重要であるかに基づいて下したのである」（C. S. ワンシンク『キリストにあって鎖に繋がれ パウロの投獄の経験と修辞』（新約学研究雑誌補遺 130）シェフィールド、1996年〔C. S. Wansink, Chained in Christ. The Experience and Rhetoric of Paul's Imprisonments, JSNT.S 130, Sheffield 1996〕、110ページ）。

90　「他者の情動の経験」はパウロによってここで「振舞いを規制する基準」と評価されている。それは、アンケ・インゼルマンが「フィリピ書における喜びの情動 語用論的、心理学的接近を考慮して」J. フライ／B. シュリーサー／V. ニーダーホーファー編『ヘレニズム・ローマ世界におけるパウロのフィリピ書簡』（新約聖書に関する学問的研究 353）テュービンゲン、2015 年〔Anke Inselmann, Zum Affekt der Freude im Philipperbrief. Unter Berücksichtigung pragmatischer und psychologischer Zugänge, in: Frey, J./Schliesser, B./Niederhofer, V. (Hgg.), Der Philipperbrief des Paulus in der hellenistisch-römischen Welt, WUNT 353, Tübingen 2015〕、255-289ページで、特にロマ14,1-3.13に基づいて強調しているように、他の箇所でもパウロにおいて観察できるパターンに対応している。

91　σπένδομαι:（献酒のように）注ぎ出される（フィリ 2,17）。N. ヴァルター「フィリピ人への手紙」同／E. ラインムート／P. ランペ『フィリピ人、テサロニケ人、フィレモンへの手紙』（NTD 新約聖書註解 8/2）ゲッティンゲン、1998 年〔N. WALTER, Der Brief an die Philipper, in: ders. /E. Reinmuth/P. Lampe, Die Briefe an die Philipper, Thessalonicher und an Philemon, NTD 8/2, Göttingen 1998〕、9-101 (64) ページの翻訳を参照。

92　その喜びの理由はフィリ 2,17-18 では明言されてはいない。χαίρω を「注ぎ出される」こと、つまりパウロの死に関連づける試みもなされた（特に W. M. L. デ・ヴェッテ『コロサイ人、フィレモン、エフェソ人、フィリピ人への手紙略解』〔W. M. L. DE WETTE, Kurze Erklärung der Briefe an die Colosser, an Philemon, an die Ephesier und Philipper, Kurzgefasstes exegetisches Handbuch zum Neuen Testament II/4, ^{2}1847〕、204ページ参照）。G. バルト『フィリピ人への手紙』（チューリヒ聖書注解新約篇 9）チューリヒ、1978年〔G. BARTH, Der Brief an die Philipper, ZBK.NT 9, Zürich 1978〕、51ページはフィリ 3,1 と 4,4 に基づいてその理由を正しく、一般的に「主にあって」に見ている。

93　J. グニルカ『フィリピ書、フィレモン書』（ヘルダー神学注解補遺）フライブルク、（1982）2002 年〔J. GNILKA, Der Philipperbrief. Der Philemonbrief, HThK Sonderausgabe, Freiburg i. Br. (1982) 2002〕、155ページは、「［フィリピの人々の］信仰における行動と生を含んでいる」ここの πίστις を広い意味で理解しなければならない、と強調している。

はっきりと決定できないのは、フィリ 2,17 において「フィリピの人々の信仰がパウ

その人たちの信仰は、そうパウロは確信しているのですが、（彼が場合によっては死んだとしても）存続するでしょう[94]。パウロはつまり、私たちはフィリ2,16を念頭にこう言うことができます、無駄に走ったわけではありません。フィリピの人たちの信仰はパウロにとってキリストの日の誇りのために役立ちます。したがってパウロは喜び、彼はフィリピにある共同体の構成員全員と共に喜びます。この直接法の発言に命令法の喜びの要請が続きます[95]。「同じようにあなた方も喜びなさい。私と共に喜びなさい」（フィリ 2,18）[96]。使徒と教会共同体を結び付ける交わりの喜びは、福音のゆえ、そしてその前進のゆえの喜びです ── 殉教という暗い可能性があるにもかかわらず[97]。

ロが祭司として捧げた犠牲の供え物であるのか、それとも使徒の働きが全体としてフィリピの人々の信仰に狙いを定めた犠牲供儀と見られているのか」ということである（J. ロロフ『使徒職 ― 宣教 ― 教会 パウロ、ルカ、そして牧会書簡による教会の使徒職の起源、内容そして機能』ギュータースロー、1965 年〔J. ROLOFF, Apostolat – Verkündigung – Kirche. Ursprung, Inhalt und Funktion des kirchlichen Apostelamtes nach Paulus, Lukas und den Pastoralbriefen, Gütersloh 1965〕、114－115 ページ）。

94　B. ヴァイス『フィリピ書 釈義し、その釈義の歴史を批判的に提示』ベルリン、1859 年〔B. WEISS, Der Philipper-Brief ausgelegt und die Geschichte seiner Auslegung kritisch dargestellt, Berlin 1859〕、177 ページ。R. A. リプシウス「フィリピ人への手紙」同『ガラテヤ人、ローマ人、フィリピ人への手紙』（新約聖書袖珍注解）フライブルク、1891 年〔R. A. LIPSIUS, Der Brief an die Philipper, in: ders., Briefe an die Galater, Römer, Philipper, HC, Freiburg i. Br. 1891〕、193－230（231）ページ参照。

95　W. シェンク『パウロのフィリピ書 注解』シュトゥットガルト、1984 年〔W. SCHENK, Die Philipperbriefe des Paulus. Kommentar, Stuttgart 1984〕、226 ページ。

96　フィリピの人たちはパウロと共に「彼が自分たちに対して無駄に労したのではなく、自分たちの信仰を本当に犠牲の供物として神に捧げたことを喜ぶ」べきなのである。そう考えるのが、リプシウス「フィリピ人への手紙」（注 94 を見よ）、231 ページ。フィリ 2,17 で視線が信仰する共同体に向けられていたとすれば、2,18(b)ではそれは喜ぶパウロに向けられている。お互いの喜びがフィリピ書で大きな役割を演じているのであるから、συγχαίρω のこの意味〔共に喜ぶ〕を想定すべきであって、プルタルコス「スパルタ人たちの名言集」同『モラリア 3』松本仁助訳、京都大学学術出版会、2015 年〔Plutarch, mor.〕、231B；バルナバ 1,3 におけるように「お祝い申し上げる」という他動詞的な意味ではない。E. ローマイヤー『フィリピ人への手紙』（批判的釈義的注解 9/1）ゲッティンゲン、第 14 版、1974 年〔E. LOHMEYER, Der Brief an die Philipper, KEK 9/1, Göttingen ^{14}1974〕、114 ページ、注 1；M. ディベリウス『テサロニケ人への手紙 I, II フィリピ人への手紙』（新約聖書ハンドブック 11）テュービンゲン、第二版、1925 年〔M. DIBELIUS, An die Thessalonicher I, II. An die Philipper, HNT 11, Tübingen ^{2}1925〕、65 ページ参照。フィリ 2,18 の変化を付けた繰り返しをディベリウスは同所で、パウロの「音の響きを揃える」好みと「関係の双方向性を出来る限り強く強調したいという願い」で説明している。

97　συγχαίρω が、フィリピの共同体メンバーも殉教に脅かされていることを暗示してい

一つの肯定的な方向転換が、そのように私たちはフィリ 2,25-30で読むのですが、エパフロディトス、パウロの「同労者であり戦友（συστρατιώτην μου）[98]」で起こりました。彼は獄中にいるパウロの許にやってきていたのです。彼は瀕死の重病になりました（フィリ 2,27）。「キリストの業のために、ここにいないあなた方に代わって私に仕えてくれるために、自分の命を差し出して、彼は瀕死[99]となりました[100]。」これ以上正確なことを私たちはこの手紙から読み取ることはできません。彼が「使徒の許での活動を遂行する際にその危険を敢えて冒す覚悟があった」病のことが言われているのでしょうか[101]？あるいは二度言われている ἀσθενεῖν「弱っている、病気である」はより広く捉えて、それが迫害の文脈で出てくる用例から理解すべきなのでしょうか[102]？悲しみ（λύπη）ではなく、今やつまり喜びが予告され、要請されているのです。すなわち、パウロはフィリピの人たちがエパフロディトスに再会して、再び喜ぶことができるように、彼をフィリピの人たちのところに送ります。彼を大喜びで迎え、尊敬すべきなのです[103]。

エパフロディトスはフィリ2,25-30で、まるで死に脅かされているパウロを鏡に映しているようにみえます。彼の場合はしかしながらすでに今や肯定的な

るのか（ローマイヤー『フィリピ書』［注 96 を見よ］〔LOHMEYER, Philipper〕111-114 ページ）、それともそうでないのか（W. ミヒャエリス『フィリピ人への手紙』（神学袖珍注解 11）ライプツィヒ、1935 年〔W. MICHAELIS, Der Brief des Paulus an die Philipper, ThHK 11, Leipzig 1935〕、49 ページ；グニルカ『フィリピ書』［注 93 を見よ］〔GNILKA, Philipper〕、155 ページ）、は論争されている。

98　フィリ 2,25。

99　μέχρι θανάτου〔2,30「死に至るまで」〕は、場合によってはフィリ 2,8 への暗示であるかもしれない。ミュラー『フィリピ書』［注 79 を見よ］〔MÜLLER, Philipper〕131。

100　チューリヒ訳を参考にした翻訳。30 節の末尾は逐語訳すると、「あなた方の私のための奉仕のなお足りないものを補うため」。

101　ミュラー『フィリピ書』（注 79 を見よ）、132 ページ。

102　シェンク『フィリピ書』（注 95 を見よ）、240 ページは、1 マカ 1,26、ダニ 11,33、マタ 25,35.42-43 を参照している。

103　エパフロディトスの喜びもパウロの喜びも話題になっていないことが目立っている。私たちが読むのはただ、パウロが、フィリピの人たちが再び喜ぶことができるように、エパフロディトスを派遣する、ということだけである。そして彼はフィリピの人たちが彼を喜びに満たされて受け容れるように勧告するのである。アンケ・インゼルマンの論文「フィリピ書における喜びの情動」（注 90 を見よ）を参照。

結果が出て、喜ばしい再会のきっかけとなっています。

すでに観察されていた、否定的なものを再解釈するパウロの傾向は、エパフロディトスについての肯定的な段落によって、なお一層強められます。しかしながらそのような否定的な経験の再解釈[104]が、この手紙のある段落では顕著なことに欠けています。すなわち、フィリ 3,2-21の論争的な段落です。ここで戦っている相手の敵対者たちについては、パウロは ── フィリ1,18の敵対者たちと同様 ── 彼らがたとえどんな動機からキリストを宣べ伝えているにせよ、自分は喜んでいると言うことはできません。よりによってこの論争的な段落はしかし、喜ぶようにとの強い要請に囲まれています。「あなた方は主にあって喜びなさい」(フィリ 3,1)。この要請は「いつも(πάντοτε)」〔という言葉〕で強められ、*repetitio*「反復」によって強められて再びフィリ 4,4で取り上げられます。「あなた方は主にあっていつも喜びなさい。もう一度私は言いたい、あなた方は喜びなさい。」フィリ 4,1でパウロは(友愛の伝統的主題を受容しながら)彼が愛しており、そばにいなくて辛い思いをしている(ἀγαπητοὶ καὶ ἐπιπόθητοι)兄弟たち、姉妹たちを、自分の喜び(χαρά)そして自分の(将来の審判の際の)勝利の栄冠であると語っています[105]。私たちがひとまずフィリピ書は文学的な統一体であるという前提から出発して考える場合[106]、フィリピ

104　現代の心理学では「認知再構成」について語られている。B. ヴィルケン『認知再構成の方法 心理療法の実践のための手引き』シュトゥットガルト、第三版、2006年〔B. WILKEN, Methoden der kognitiven Umstrukturierung. Ein Leitfaden für die psychotherapeutische Praxis, Stuttgart ^{3}2006〕、13-40ページの概観を参照。

105　彼はフィリピの人たちを彼が愛している者たち(ἀγαπητοί)として、主にあって堅く立つように勧告する。

106　フォレンヴァイダー『フィリピ書』[注2を見よ]〔VOLLENWEIDER, Philipperbrief〕、2464ページはフィリピ書を統一的な、考え抜いて構成されたテクストと理解する。クラウク『古代の書簡文学』[注77を見よ]〔KLAUCK, Antike Briefliteratur〕、241ページ;P. ヴィック『フィリピ書 その内容の鍵としての形式的構成』(旧新約学への学問的寄与135)シュトゥットガルト、1994年〔P. WICK, Der Philipperbrief. Der formale Aufbau des Briefs als Schlüssel zum Verständnis seines Inhalts, BWANT 135, Stuttgart 1994〕をも参照。別意見は特にR. ペッシュ『パウロとそのお気に入りの共同体 パウロ―再考 フィリピの聖者たちへの三通の手紙』(ヘルダー文庫1208)フライブルク、1985年〔R. PESCH, Paulus und seine Lieblingsgemeinde. Paulus – neu gesehen. Drei Briefe an die Heiligen von Philippi, HerBü 1208, Freiburg i. Br. 1985〕。

の人たちに対する喜びへの強い要請は、敵対者たちに注意するようにとの警告と何らかの形で関連しているはずです。場合によってはフィリピの人たちは喜びによって敵対者たちに対して「免疫が付いた」あるいは「抵抗力がある」状態になるべきだ、と言うことができるのかもしれません。すなわち、この教会共同体がその周辺世界との葛藤を逆説的な喜びのきっかけと再解釈し、自分たちを肯定的な生の共同体として体験するならば、敵対者たちにはもはやこの共同体を獲得して我がものとするチャンスがありません。もし敵対者たちがフィリピの人たちの間で、その人たちが割礼[107]と食物規定[108]を受け入れることによって、ユダヤ教の政治的な共同体のメンバーと見做されるようになり、そうして異教の周辺世界との葛藤（とそれと結びついた苦難）を回避することができる[109]、と宣伝していたとするなら、このことは特に腑に落ちる説明となるでしょう。喜びに満たされている人は、不安に怯えて自分を周りに合わせるということに傾くことがより少ないものです。さらに加えて、もしその人たちが肯定的に評価され、体験されている集団に支えられていると知っているなら、その周辺世界との不一致に耐えることが ── たとえそれが危険でないことはないとしても ── できます。

喜びはしかしフィリピの人たちが、その周辺世界との緊張を減らすことができるように助けてくれるはずです ── 自分たちのアイデンティティーを放棄せずに。そこで強調され、繰り返された喜びへの要請の後に、こう言われます。あなた方の「寛大さ」を全ての人が感じ取るようにしなさい（フィリ 4,5）。フィリピの人たちは、人々の称賛に値する、善いこと全てをなすべきなのです（フィリ 4,8）[110]。喜びを携えている人たちはその周辺世界に魅力を発散し、そ

107　フィリ 3,2–3 参照。

108　食物規定への暗示を G. タイセンは断罪的な発言「あなた方の神は腹である」（フィリ 3,19）において推測している。G. タイセン著、大貫隆訳『新約聖書』教文館、2003 年〔G. THEISSEN, Das Neue Testament, München, 2002〕、101 ページ参照。

109　キリスト者たちは何と言ってもユダヤ人会堂共同体に参加することによって、ユダヤ人たちに授与されていた〔公認宗教の〕特権を（共に）享受することができたであろう。フォレンヴァイダー『フィリピ書』［注 2 を見よ］〔VOLLENWEIDER, Philipperbrief〕、2466 ページ。

110　キーワード ἀρετή〔徳〕に注意。

のことによって肯定的な影響を及ぼし、人々を獲得することができます。

外部の敵対者に対する恐れはしたがって何も「福音の信仰のための闘い」（フィリ 1,27-28）の役に立ちません。内部の不一致も同様に、パウロが友愛の伝統的主題[111]、そして特にキリストが開いた可能性の根拠[112]を引き合いに出して強調しているように、役に立ちません。友愛と喜びは〔古典〕古代の見解に従えば、表裏一体です。すなわち一方が他方のことを喜び、他方が一方のことを喜ぶのです。パウロはフィリピの人たちへの勧告をその人たちに対する自分の喜びで動機付け[113]、もっと喜ぶように励まして、肯定的なものを強めています。すなわち、「あなた方は私の喜びを完全なものにしてください」（フィリ 2,2）── しかも内部の一致によって。パウロがフィリ 4,2-3で、教会の中で競い合っている二人の女性、エウオディアとシュンテュケを念頭に言い表している、同じ思いを抱き、一致することの勧めも、〔直前の4,1で言われている〕喜びの徴の下にあります。すなわち、「あなた方［私の兄弟たち、姉妹たち］は私の喜びです」[114]。再び彼はその際、友愛の言葉を用いています。パウロを主にあって非常に喜ばせてくれる[115]フィリピの人たちの贈り物は、何か ── 正し

111　フィリ 1,27-30（外部に向けての視点と共に）、フィリ 2,1-2（内部に向けての視点と共に）。

112　外部に向けての視点においても（「あなた方は、キリストのために尽力する〔直訳：苦しむ〕ことを恵みとして受け取っている」、フィリ 1,29）、内部に向けての視点においても（キリストにあって「愛の慰め、霊の交わり、思いやりと憐れみ」がある、フィリ 2,1）。

113　フィリ 2,2。パウロはそう言ってフィリピの人たちを称賛しながら、その「状態が…すでに喜ばしいものである」と伝えているのである（E. ハウプト「フィリピ人への手紙」『獄中書簡』第七ないし六版から新編集（批判的釈義的注解 8、9）ゲッティンゲン、第八［ないし七］版、1902 年〔E. HAUPT, Der Brief an die Philipper, in: Die Gefangenschaftsbriefe, von der 7. bzw. 6. Auf. an neu bearb., KEK 8 und 9, Göttingen [8 bzw. 7]1902〕、1-180 [55] ページ）。T. C. ジョフリオン『フィリピ書の修辞的目的と政治的軍事的性格 堅く立つようにとの呼びかけ』ルウィンストン、1993 年〔T. C. GEOFFRION, The Rhetorical Purpose and the Political and Military Character of Philippians. A Call to Stand Firm, Lewinston 1993〕、121 ページ参照、「パウロの要請は…彼のその人たちに対する関係を通して彼がすでに経験していた喜びを確証する」。

114　フィリ 4,1。フィリ 4,4 の喜びへの呼びかけを参照。

115　パウロの喜びはフィリ 4,10 で μεγάλως〔大いに〕によって強められている、ἐχάρην δὲ ἐν κυρίῳ μεγάλως〔さて私は主にあって大いに喜んだ〕。

く理解されるなら ── 友愛の最高の表現であるものなのです。それは使徒と教会共同体をなお一層密接に結び付けてくれました[116]。そしてそれはさらに「神に喜ばれる供え物」（フィリ 4,18）なのです。

2.2　著者志向の視点の下でのフィリピ書

フィリピ書でパウロはまた自分自身の置かれている状況について思い巡らし、自分自身に言い聞かせてもいます[117]。死刑判決の可能性がその上に漂っているパウロが獄中からフィリピの人たちに手紙を書いている時に、自分と自分の状況についても考えるというのは、当然ありそうなことです[118]。彼をフィリピの人たちと一つの友愛関係が結びつけていることが、自分について率直に考え、自らをその人たちに対して手紙の中で開き示してゆくことを容易にしたものと思われます。

死の危険という限界状況をパウロは今選りに選って「喜び」によって克服します。私たちは、パウロの肯定的な解釈が用いられている、いくつかの互いに密接に関連したテーマ群を観察することができます。三つを挙げましょう。それは、

a．彼を支え、安定させてくれるフィリピの教会共同体に対する友愛の関係。彼が深め、説明しようとしている関係です。それと密接に結び付いていて、おそらくなお一層これよりも意味があるのが、キリストおよび神に対する関係です。私たちはここで〔それを〕交わりの喜び〔と呼んで、それ〕について語ることができます。

116　マルハーベ「自足」［注 64 を見よ］〔MALHERBE, Self-Sufficiency〕、137－138 ページ。

117　これはフォルトナのフィリピ書は使徒の自己中心的な手紙であるとする捉え方の真理契機である。R. T. フォルトナ「フィリピ書 パウロの最も自己中心的な手紙」同／B. R. ガヴェンタ編『会話は続く パウロとヨハネの諸研究 J. ルイス・マルティン記念論集』ナッシュヴィル、1990 年、220－234 ページ〔R. T. FORTNA, Philippians. Paul's Most Egocentric Letter, in: ders./B. R. Gaventa (Hg.), The Conversation Continues. Studies in Paul and John in Honor of J. Louis Martyn, Nashville 1990, 220－234〕参照。

118　フォルトナ「フィリピ書」［注 117 を見よ］〔FORTNA, Philippians〕、222 ページは、「恐れ、ほとんど彼の［パウロの］早い死が不可避であること、がこの手紙全体に浸透している」というテーゼを主張している。

b．パウロは自分をモデルと理解し ── そしてそのようなものとしてキリストの実存と結び付いています[119]。

c．パウロの喜びはまた将来から、キリストの裁きの座の前での「称賛」、彼の宣教の成果が認められることから、規定されています。

これら三つの点を以下で詳しく述べたいと思います。

a に関して。パウロが獄中からフィリピの人たちに、彼は神の御前にその人たちのために祈りにおいて「喜びに満たされて」進み出る（フィリ 1,3-4）、と書く時、彼はその視線を神から教会共同体に向け、同時に彼のこの人たちに対する感情的な結び付きを深めます[120]。彼がフィリピの人たちの κοινωνία εἰς τὸ εὐαγγέλιον ── 福音に与っていること ── に感謝している時[121]、彼は一方でその人たちの κοινωνία「共に与っていること、交わり」について語ることで、〔古典〕古代の友愛の倫理という伝統的主題に立ち戻っています。他方で彼は、両者を結び付けており、パウロの生の基盤であり生の実質的内容である上位の存在に感謝しながら焦点を当てます。すなわち、福音です[122]。

パウロがフィリピの人たちのために祈っているだけではありません。フィリピの人たちもまた彼のために祈っています（フィリ 1,19）[123]。さらに彼をイエス・キリストの霊も助けてくれます ── パウロはつまり自分が独りだとは感じていません[124]。そのことが将来に目を向けても彼を喜ばせてくれます（καὶ χαρήσομαι「私はこれからも喜ぶでしょう」フィリ 1,18）。

パウロが喜んでいるのはまた、フィリピの人たちが彼にエパフロディトスを通して支援を届けてくれたことです（フィリ 4,18）。彼の患難をその人たちは

119　彼のモデルとしての機能は「小規模に」変化を付けて〔*in variatio*〕彼の同労者エパフロディトスに反映している。

120　このことを彼は、フィリピの人たちを 4,1 で「愛している、そばにいなくて辛い思いをしている（ἐπιπόθητοι）兄弟たち、姉妹たち」と呼びかける時にも行っている。

121　ἐπὶ τῇ κοινωνίᾳ ὑμῶν εἰς τὸ εὐαγγέλιον …〔あなた方が福音に与っていること〕フィリ 1,5；1,7 参照（συγκοινωνούς μου〔私と共に与っている者たち〕）。

122　パウロはつまりフィリピの人たちと友愛においてのみでなく、信仰においても結び付いている。両者がお互いのために祈るのは偶然ではない（フィリ 1,4.19）。

123　教会共同体の執り成しの祈りに基づく救いについては、2 コリ 1,11; 1 テサ 5,25 も参照。さらにロマ 15,30 参照。

124　暗示的にはここで、彼のために祈ってほしいというフィリピの人たちへの呼びかけを聞き取ることができる。

彼と共に分かち合い[125] ――〔古典〕古代の友愛倫理に即して ――、そうしてその関係を深めてくれました[126]。

b に関して。パウロは自分を、彼と同じようにキリストのために苦難を負って同じ闘い（Agon〔競争〕）をしている、フィリピの人たちのモデルとして提示しています（フィリ 1,30）。パウロを手本にして ―― 特にまたキリストの模範に照らして（フィリ 2,5-11）―― その人たちは、自分たちの状況を新たに評価することを学ぶべきなのです[127]。限界状況の克服のためにモデルとして機能する[128]という意識は、パウロをたしかに直接喜びで満たすものではありませんが、しかしその人生の困難な状況にあって自分の存在意義を成長させ、彼に勇気を与えるものです[129]。

c に関して。喜びのモティーフはさらにパウロが将来について思い巡らす文脈に出てきます。フィリ 1,21-26ではこの熟考は、一つの内的な対話の形で行われます ―― ちなみにこれはストア派によって、死、投獄、軽蔑等々に備えるための *meditatio*、黙想の形で推奨されているものです[130]。内的な対話の形でパ

125　フィリ 4,14: συγκοινωνήσαντές μου τῇ θλίψει〔私と患難を共にしてくれた〕― 友愛倫理の伝統的主題（トポス）。

126　マルハーベ「自足」［注 64 を見よ］〔MALHERBE, Self-Sufficiency〕、130 ページ参照、「彼がしていることは…それによって彼と彼の読者たちがより親密に引き寄せられる行為としての贈り物の意義を…引き出すことである。」同書 138 ページ参照。

127　エパフロディトスは、死に脅かされたパウロと共に闘う者がいかに神の憐れみを経験したか（フィリ 2,25-30）、そして苦痛（λύπη）が彼とパウロから取り去られたか、ということの生きた模範例を提示している。

128　フィリ 1,30。フィリ 3,2-11 でもパウロは自分をフィリピの人たちのモデルとして提示している。彼が自分の以前の時と決別したように、フィリピの人たちも敵対者たちと決別すべきなのである。

129　アンティオキアのイグナティオスを参照 ― 彼はその殉教への途上で教会共同体を思い浮かべる。

130　エピクテトス『語録』〔Epiktet, diss.『語録 要録』鹿野治助訳、中央公論社、2017 年〕2,1,34-40 参照。内的対話の目的は「それ自体善でも悪でもないこと（adiaphora）の真の性質を顕にすること」である（R. J. ノイマン「日々黙想する 帝政期ストア派における黙想の理論と実践」『ローマ世界の興亡』第 2 部 36 巻の 3、1989 年、1473-1517 [1481f.] ページ〔R. J. NEUMANN, Cotidie meditare, Theory and Practice of the Meditation in Imperial Stoicism, in: ANRW 2.36.3 [1989], 1473-1517 [1481f.]〕、R. ラムサラン「モラリストたちの足跡に従い フィリピ書 4 章におけるパウロの修辞的論法」T. H. オルブリヒト／A. エリクソン編『聖書の談話における修辞、倫理そして道徳的説得 2002 年ハイデルベルク学会論集』ニューヨーク、2005 年、284-300 [293] ページ〔R. RAMSARAN, In the Steps of the Moralists. Paul's Rhetorical Argumentation in Philippians 4, in: T. H. Olbricht/A. Erikson [Hg.], Rhetoric, Ethic and Moral Persuasion in Biblical Discourse. Essays from the 2002 Heidelberg Conference, New York 2005, 284-300 [293]〕参照）。

ウロは ── フィリピの人たちの友愛に支えられて ── 率直大胆に彼の裁判が取りうる結末の二つの可能性を省察します[131]。すなわち、彼の死あるいは生存です。どっちつかずで彼は二つの可能性に向き合っています（フィリ 1,23a）。一方で彼はこの世を去ってキリストの許にいたいという欲求を持って（ἐπιθυμίαν ἔχων）います（フィリ 1,23b）。他方では彼は生き延びることがより必要だと評価しています ── 共同体のために（フィリ 1,24–25）[132]。自分が死んだ場合にはパウロはフィリピの人たちのために、その人たちが喪失を克服することを助けるための解釈の可能性を提供しています[133]。さらに彼はフィリピの人たちのために（殉教者の）死のモデルとして機能します。第二の場合、彼が生き延びた場合には、パウロは「あなた方にとって前進となるため、信仰における喜びとなるため（εἰς τὴν ὑμῖν προκοπὴν καὶ χαρὰν τῆν πίστεως）」という動機を提供しています（フィリ 1,25）[134]。ここでの関心の中心は教会共同体です。その信仰における喜びが彼の目標であり、彼を支えているのです[135]。彼を動機付ける喜びはフィリ 1,25では彼自身の外にあります。彼を動機付けているのはフィリピの人たちの喜びなのです[136]。

131　フィリ 1,21–26。

132　類似の行論を私たちはキケロー『弟クィントゥス宛書簡』〔Cicero, ad Quintum fratrem〕1,3,2 に見出す。そこで獄中のキケローは自分の弟に（「家族書簡」と特徴付けられるべき手紙 ― ワンシンク『鎖に繋がれ』［注 89 を見よ］〔WANSINK, Chained in Christ〕、106 ページ ― において）こう書いている。「しかし私はあらゆる神々を証人に呼び出す、ただこの一言が私を死から引き戻したのだ、すなわち皆が私の生の中にあなたの生の一部があると言ったことだ。」（翻訳は H. カステン『M. トゥッリウス・キケローの弟クィントゥス宛書簡、ブルートゥス宛書簡、書簡断片、補遺 Q. トゥッリウス・キケローのコンスル選挙備忘録 ラテン語・ドイツ語対訳』ミュンヘン、1965 年〔H. Kasten: M. TULLI CICERONIS, Epistulae ad Quintum Fratrem, Epistulae ad Brutum, Fragmenta Epistularum, accedit Q. Tulli Ciceronis Commentariolum Petitionis/M. Tullius Cicero, An Bruder Quintus, An Brutus, Brieffragmente, dazu Q. Tullius Cicero Denkschrift über die Bewerbung, Lateinisch-deutsch, hg. von H. Kasten, München 1965〕、57 ページ）。

133　フォレンヴァイダー「フィリピ書」［注 2 を見よ］〔VOLLENWEIDER, Philipperbrief〕、2461 ページ。

134　「おそらく」 ― とミュラー『フィリピ書』［注 79 を見よ］〔MÜLLER, Philipper〕、71 ページは考えている ― 「『前進』と『喜び』は…説明の καί で結び付けられている、『あなた方の前進のため、そうだ、信仰からの喜びのため』。」

135　〔古典〕古代の情動理論において肯定的にも否定的にも含意された欲求／情欲（ἐπιθυμία）の情動でパウロは自分自身の切望を表し、古代の情動理論において排他的に肯定的に含意されていた χαρά〔喜び〕の概念で彼は自分の目的を表している。

136　フィリピ 1,26 で扱われているのは「共同体だけの誇りと喜びの根拠」である（ミュラー『フィリピ書』［注 79 を見よ］〔MÜLLER, Philipper〕、71 ページ、注 116）。それは、パウロが信仰に根ざす喜びを実存的な次元で知らないという意味ではない。2 コリ 1,23; 2,3; 7,4 参照。

色々な意味でパウロをその投獄という困難な状況の中で助けてくれるのは、キリストの日の展望です[137]。「私は将来においてもまた喜ぶだろう（χαρήσομαι）」とパウロはフィリ 1,18-19で書きます、「なぜなら私は知っているからです。これら一切[138]は私の［終末における］救いへと導いてくれるでしょう。あなた方が私のために祈り、イエス・キリストの霊も私を助けてくれるのですから」[139]。そのため彼は、来るべきことを、切に待望しているのです（フィリ 1,20）。

フィリピの人たちに、主にあって堅く立つことを勧める枠内で、パウロは彼の喜び（χαρά）と彼の勝利の栄冠（στέφανος）を挙げています[140]。彼は、フィリピの人たちが彼にキリストの日に、終末の審判において、彼が弁明をしなければならない時[141]、「特別な賞を与えてくれる」[142]ことを希望しています[143]。こ

137　フィリ 2,16: εἰς καύχημα ἐμοὶ εἰς ἡμέραν Χριστοῦ〔キリストの日に私にとって誇りとなる〕。

138　意味されているのは、ミュラー『フィリピ書』［注 79 を見よ］〔MÜLLER, Philipper〕、57 ページによれば、「現在の状況」である。

139　翻訳はチューリヒ聖書。フィリピの人たちのパウロのための祈願の指摘は暗示的にはまた要請の機能がある。基盤となっているのは、「天上の会議の前での成果を上げた宣教者の顕彰」という表象である（フィリ 2,16; 2 コリ 1,14; 1 テサ 2,19）」（S. フォレンヴァイダー「終末における称賛 フィリピ書における審判待望の背景」W. クラウス編『原始キリスト教の神学史への寄与 U. B. ミュラー古稀記念シンポジウム』（新約学雑誌補遺 163）ベルリン、2009 年、307-317 [316] ページ〔S. VOLLENWEIDER, Lob am Jüngsten Tag. Zum Hintergrund der Gerichtserwartung im Philipperbrief, in: W. Kraus [Hg.], Beiträge zur urchristlichen Theologiegeschichte. Symposium aus Anlass des 70. Geburtstags von U. B. Müller, BZNW 163, Berlin 2009, 307-317 [316]〕）。

140　フィリ 4,1。1 テサ 2,19 参照、「なぜなら誰が私たちの希望あるいは喜び（χαρά）あるいは私たちの誇りの冠（στέφανος καυχήσεως）なのか―我らの主イエスの御前で、彼が来る時、あなた方もそれであるのではないのか」。誇りの冠としての教会共同体については M. ブレンドル『パウロにおける競争 パウロの競争の隠喩の起源と特徴』（新約聖書に関する学問的研究第 2 シリーズ 222）テュービンゲン、2006 年、320-322 ページ〔M. BRÄNDL, Der Agon bei Paulus: Herkunft und Profil paulinischer Agonmetaphorik, WUNT 2/222, Tübingen 2006, 320-322〕参照。栄誉賞としての喜び（χαρά）については、フィロン『報賞』〔praem.〕31 参照、「笑うことはしかし見ることのできない心の喜びの身体によって与えられた明らかな徴である」（フォレンヴァイダー「称賛」［注 139 を見よ］〔VOLLENWEIDER, Lob〕、313 ページ、注 27）。

141　2 コリ 5,10 参照。

142　フォレンヴァイダー「フィリピ書」［注 2 を見よ］〔VOLLENWEIDER, Philipperbrief〕、2466 ページ。同「称賛」［注 139 を見よ］〔VOLLENWEIDER, Lob〕、309 ページ参照。

143　そして彼がその希望を表現する仕方で、それはフィリピの人たちにとって要請の性格も持つ。

のパウロが自分に言い聞かせていることはもちろん暗示的に、フィリピの人たちに対するアピールにもなっています[144]。

3 〔古典〕古代の周辺世界と比較したパウロの喜びとの付き合い方

最後に、フィリピ書におけるパウロの喜びの特徴を、〔古典〕古代の「喜び」に関する情念の言説の枠内で描くことを試みてみましょう。その際四つの側面が語られることになります。喜びの交わりの性格、肯定的なものに焦点を合わせること、苦難における喜びという逆説、そして喜びにおける現在と将来という時間的側面です。

3.1 交わりの喜び

フィリピ書の喜びに特徴的なのは、その社会的な側面です ── 喜びと「交わり」は ── 神学的にそして社会的に ── 密接に含意されています。

それに対して私たちはストア思想においては個人への集中を観察します。セネカによれば真の喜び（*gaudium, laetitia*）は人間の中から、人間自身の中に成立します[145]。喜びは彼の意見に従えば、人間の外部には何ら原因を持つことがありえません ── もしそうだとすればそれはもう「異質な力」に依存しており、したがって不安定で常に「取り上げられるという恐れによって土台を掘り崩される」ものとなってしまうでしょう[146]。

144　パウロが自分に言い聞かせていることとフィリピの人たちへのアピールは繰り返し手を携えて進んでいる。たとえば獄中のパウロが（間接的に）彼がフィリピの人たちからすでに受けた喜びを強調する時（フィリ 1,4; 2,17; 4,1）、フィリピの人たちが一つの思いとなり、互いに同一の愛に結びつき、一つの心になって同じことを考えることによって、彼の喜びを完全にすべきであると書く時〔フィリ 2,2〕。

145　上述およびフーコー「配慮」［注 38 を見よ］〔FOUCAULT, Sorge〕、第 3 巻、91 ページを見よ。さらにフィロン『劣悪』〔det.〕137 も参照。賢者は（真の）喜びを「自らの周りの事物においてではなく」「自分自身のうちに」見出す。」

146　フーコー「配慮」［注 38 を見よ］〔FOUCAULT, Sorge〕、第 3 巻、91 ページ。

3.1.1　この異質な力はパウロにとってはしかしながら、喜びに何度も付けられている「主にあって」という付加が明らかにしているように（フィリ 3,1；4,4；4,10）、全く確実に存在しています。そしてこの主にある喜びは肯定的な意味を占めています。この「主に」あることはパウロにとって変わらぬ喜びの根拠であり、このキリスト者はその回心とバプテスマの後、キリストと切っても切り離せないように結び付けられていて[147]、そのうちに自分の故郷を見出しています[148]。まさにこの喜びが「主に」基礎付けられていて、恣意的な人間の気分や経験や関係に基づいているのではないことが、それを失うのではないかという不安から解放し、変わらぬ喜びを可能にしてくれるのです[149]。

3.1.2　それと並んで、この主と結び付いていると感じている者たちの共同体が、喜びの原因です[150]。他者への、そして他者との喜び、交わりを強める共に喜ぶこと（そして共に苦しむこと）は〔古典〕古代の友愛に関する言説も知っており、友の共同体、つまりエピクロス派の者たちの生の実践を特徴付けています。私たちがフィリピ書において多くの箇所で友愛の、そしてまた家族書簡の特徴的な主題群に出会うのは偶然ではありません ── たとえ（エピクロス派

147　ここで交わりの思想が力を発揮する。すなわち、キリストの許にいることが喜びである ― ちょうど友がその場にいてくれることが喜びを意味するように。

148　パウロにおいては、彼の諸々の確信のラディカルな価値顛倒を意味したラディカルな回心の帰結として（フィリ 3,4－6）。特に 3,9（εὑρεθῶ ἐν αὐτῷ〔彼のうちに見出されるため〕）と 3,10（κοινωνίαν τῶν παθημάτων αὐτοῦ, συμμορφιζόμενος τῷ θανάτῳ αὐτοῦ〔彼の諸々の苦難に与ること、彼の死と同じ形にされつつ〕）を参照。「基盤となるキリスト体験は」、とブルン「定式」［注 1 を見よ］〔BRUN, Formel〕25 ページは言う、「…不断のキリストとの交わりにおいて継続してゆく。」― M. T. ヴィンセント『フィリピ人、フィレモンへの手紙』（国際批判注解）エディンバラ、1972 年〔M. T. VINCENT, Epistles to the Philippians and to Philemon, ICC, Edinburgh 1972〕、91 ページは神秘的な生をどちらかと言えば抽象的に解釈している。すなわち、*en kyrio*〔主にあって〕は「喜びの場ないし要素」を意味しているのだという。

149　マードック『フィリピ書』［注 84］〔MURDOCH, Philipperbrief〕、146 ページ参照。「キリスト者の喜びは体験に由来するのではなく、日常の個々の経験から来るのではなく、その尽きることのない源泉をイエス・キリストに持っている。」喜びを神に溯源させることを私たちはフィロンに見出す。彼は神を喜びを「生み出す者」と解釈している。

150　フィリ 4,1.10。パウロにおける交わりの喜びについては 1 コリ 12,26; 16,17; 2 コリ 2,3; フィリ 1,25; 2,28－29 をも参照。

とは違って）当該の友（φίλος）そして友愛（φιλία）という概念がフィリピ書に欠けているとしても[151]。パウロは何と言っても、手紙の受取人たちを兄弟たち（そして姉妹たち）（ἀδελφοί）と呼びかけて、家族の構想を好んで用いています[152]。フィリピの人たちの献金についての喜びを言い表した後、パウロはフィリ 4,11−13でそれにもかかわらず彼の自足（αὐτάρκεια）[153]を強調し、そうして彼がその贈り物をただ、功利的あるいは感情的な動機に基づいている友愛[154]の表現として受け取るのではなく、与え、受け取る交わり（フィリ 4,15）において患難を友と共に分かち合いたいのだ（フィリ 4,14）、ということを明らかにしています[155]。それは、アリストテレスにおける友愛の最高の段階に対応します。喜びが ── 苦難もまたそうであるように ── 共同の組織を結び付けることを、プラトンがたとえばすでに『国家』において表現しています[156]。パウロにおいてはただフィリピ書と 1 コリント書にだけ συγχαίρω「共に喜ぶ」が出てきます[157]。1 コリ 12,26では共に喜ぶことは身体の隠喩と結び付けられていて、それはパウロにとってフィリピ書においても共鳴しているかもしれません。

151　このことについては、マルハーベ「自足」［注 64 を見よ］〔MALHERBE, Self-Sufficiency〕、138−139 ページ参照。

152　〔古典〕古代の道徳哲学の著者たちにはしかし、兄弟愛と友愛、家族倫理と友愛倫理の間の相関関係が観察できる。クラウク「教会」［注 77 を見よ］〔KLAUCK, Kirche〕、3 ページ参照。

153　自足はストアの理想である。

154　アリストテレス『ニコマコス倫理学』8,3 (1156a 10−15)、「ある者たちは…利益のゆえに、そしてそれ自体としてではなく、彼らが互いに財産を調達する限りで、互いに愛し合う。同じことが、互いに快楽のゆえに愛し合う者たちに当てはまる。…つまり、利益のゆえに愛する者は、それを自分自身の利得のゆえに行うのであり、快楽のゆえに愛する者は、それを自分自身の快楽のゆえに行うのである…」。

155　このことについてはマルハーベ「自足」［注 64 を見よ］〔MALHERBE, Self-Sufficiency〕、フィッツジェラルド「フィリピ書」［注 77 を見よ］〔FITZGERALD, Philippians〕、158 ページ参照。

156　プラトン『国家』5,426b.c。

157　フィリ 2,17−18; 1 コリ 12,26; 13,6。七十人訳では συγχαίρω は創 21,6 にだけ見られ、3 マカ 1,8 で一つの写本に見られる。

3.1.3　この交わりの喜びではある特徴が目立っています。すなわち、フィリ 2,25-30で特に明らかになるように、他者への方向付けです[158]。そこではパウロが、教会共同体のメンバーたちが喜ぶことができるようにエパフロディトスをフィリピに送り出しているのですが ── 彼は自分自身の喜びについて、あるいはエパフロディトスの重い病の後の快復についての喜びについて何も書いていません。フィリ 1,24-25の、この世を去ってキリストの許にいるよりもむしろさらに生き続けるというパウロの決断も、自分の利益ではなく、教会共同体のメンバーの〔信仰の〕前進と喜びで動機付けられています。

3.2　肯定的なものに焦点を合わせること

肯定的なものに焦点を合わせることで、パウロは一つの古い心理学的な方法 ── *bona cogitare*「良いことを考えること」(ταῦτα λογίζεσθε)[159] ── を取り上げます。すでにエピクロスが、良いことを考えることを教えていました。この見解は〔古典〕古代において広く受け容れられました。一つの重要な役割を演じているのがこの関連で、喜びに満ちた感謝です[160]。パウロにおいても私たちは、彼が獄中から「喜びに満たされて」祈りにおいてフィリピの共同体のために執り成す時（フィリ 1,3-4)、肯定的なものに焦点を合わせていることを観察できます。私たちはそのことをまた、彼がその眼差しをもはや自分自身と自分の鎖に向け続けるのではなく、彼の投獄の肯定的な効果に向けている時、見出します。すなわち、「兄弟姉妹の多数」が主への信頼において強められ、そして今やより決然と振る舞う危険を冒すようになった（フィリ 1,14）ということです。肯定的に彼が評価しているのは最後にそれどころか、フィリ 1,18の競合する宣教者たちの登場です。彼を喜ばせているのは ── 動機は何であれ ──

158　ここで私は助手のアンケ・インゼルマンの観察を取り上げる。彼女の論文「喜びの情動」[注 90 を見よ〕〔Inselmann, Affekt der Freude〕参照。

159　これについては注 72 を見よ。〔訳注：フィリ 4:8 末尾「あなた方はこれらのことを考えなさい」〕

160　〔古典〕古代のお悔やみ状における「困難の只中における」感謝（*gratias agere*）の意義についてはハロウェイ「良いことを考える」[注 72 を見よ〕〔HOLLOWAY, Bona cogitare〕、38 ページ参照。

キリストが宣べ伝えられることだ、というのです。そう、それどころか自分に起こりうる死でさえ彼は肯定的に捉えることができます（フィリ 2,17-18）。彼がフィリピの人たちにも強く勧めている解釈です[161]。

それにもかかわらずパウロには一つのズレが観察できます。エピクロスでは ταῦτα λογίζεσθε「あなた方はこれらのことを考えよ」、そしてキケローでは *bona cogitare*「良いことを考えること」と書かれています ── 両者ともつまり認知的な要素を強調しています。パウロはそれに対して直接「喜び」について語ります ── ここでは情念の要素が前面に出てきます。さて喜びはたしかに一方では *avocatio-revocatio*「逸らし-転換」の方法[162]、つまり肯定的なものに焦点を合わせる方法の文脈でも出てきます。そして他方ではどの情念もまた、自然的な衝動の認知的な評価の出来事と結び付いています[163]。しかしながら目立っているのは強調点のズレです。そしてそのズレは、私たちが、喜び（χαρά）はパウロにとってガラ 5,22によれば霊の実であるということを意識する時、より一層大きくなります。

3.3　逆説的な喜び

肯定的なものに焦点を合わせることはしかしながら、パウロが自分が置かれている困難な状況、またその下にフィリピの人たちが立っている苦難の圧力を単に〔心理的に抑圧して〕忘れようとしている、ということを意味しません。敵対者たちがおそらく苦難の圧力を、共同体メンバーが〔周囲から〕受けている圧迫をテーマとして扱うことで、高めているのに対して、パウロはこれに喜びを対置します。この喜びは逆説的で[164] ── それは苦難があるにもかかわらずの喜び、あるいは苦難からの喜びです ── おそらく黙示的な伝統に根差す表象で

161　フィリ 2,18 他多数。

162　ハロウェイ「良いことを考える」［注 72 を見よ］〔HOLLOWAY, Bona cogitare〕、95 ページ、注 41 参照。ラムサラン「モラリストたち」［注 130 を見よ］〔RAMSARAN, Moralists〕、297 ページはしかしながら、フィリピ書 4 章を睨んで祈りを「理性的な願い」と解釈している ― それは βούλησις〔計画〕に対応するのだという。

163 現代の心理学は評価（appraisal）について語る。〔訳注：フィリ 4,8-9 では認知「これらのことを考えなさい」と行動「これらのことを実行しなさい」が結び付いている。〕

164　パウロにおいて私たちは対照的な喜びの表象を見出す。「私たちには苦痛が加えられているが、しかしながら私たちはいつも喜んでいる」（2 コリ 6,10 Einheitsübersetzung〔共同訳〕）。

す[165]。敵対者たちはフィリピの人たちに、国家的に公認された *religio*「宗教」の保護下の存在を可能とするために、ユダヤ教のアイデンティティーの徴を受け容れるように動機付けようとしているのに対して、パウロは苦難に直面しての喜びに向けて他者〔観察〕による教化を通してフィリピの人たちにその力を与えます。その際彼は自分自身を持ち出します ── 彼はいわば自分自身に教え聞かせて、そしてフィリピのキリスト者たちの模範として役立っているのです*。

3.4　現在と将来の喜び

時間の観点でパウロはユダヤ・キリスト教の伝統の中に立っています。

ストア思想は、以下の表が明らかにしているように、喜びを現在に位置付けます[166]。

現在への関連	将来への関連
πάθη「情念」	
ἡδονή「快楽」	ἐπιθυμία「欲望」
Λύπη「悲しみ」	φόβος「恐れ」
εὐπάθειαι「享楽」	
χαρά「喜び」 「真の善を所有していることを知っている魂の高揚としての喜び」[167]	βούλησις「計画」 「理性的な願い」
—	ἔκκλισις 「理性的な回避」

165　たしかに喜びと苦難の対照は異教の文脈で支配的であるが、しかし ── エピクロスのような哲学者においてさえ ── この喜びの逆説的な構想を受容する端緒がある。上述を見よ。

*　訳注：他者観察による学習については、A.バンデュラ編、原野広太郎、福島脩美訳『モデリングの心理学 観察学習の理論と方法』金子書房、1975 年〔A. Bandura (ed), Psychological Modeling. Conflicting Theories, Atherton 1971〕を参照。

166　ἡδονή については『初期ストア派断片集』3 巻〔SVF III〕、断片 386＝アリストテレス『ニコマコス倫理学』p.45,16 に保存されているアスパシウスの断片（ニッケル『ストア』［注 22 を見よ］〔NICKEL, Stoa〕、Nr.783）参照。フィロンはストアの捉え方を受容しているが、『変化』〔mut.〕163 では、希望を「喜びの前の喜び」と定義して、それを凌駕している（注 54 参照）。

167　ポーレンツ『ストア』〔POHLENZ, Stoa I〕［注 26 を見よ］、152 ページ。

パウロはこれに対してこれを超えて喜びに満ちて将来を展望し、キリストの裁きの座の前で彼の宣教の成果が認められることを待ち望んでいます（フィリ 4,1）[168]。

旧約聖書の後期の諸テクストやクムランでは現在の苦難と将来の喜び[169]がしばしば互いに対置されます。それらは時間的な継起において相次いで起こります。それに対してパウロでは喜びはすでに現在であり、将来にまで及んでいます[170]――〔この世と来るべき〕世の転換は彼にとって何と言ってもすでにキリストの死と復活において幕を開け[171]、彼の再臨の際に[172]完成されることを待ち望んでいるのです。

「主にある」[173]そして来るべきキリストを待ち望んでの喜びは、フィリピ書をあらゆる苦難と苦境にもかかわらず特徴付けている „Gaudeo, gaudete“「私は喜んでいる、あなた方は喜びなさい！」の神学的な基盤なのです。

168　パウロの「名声の喜び」はその際、〔古典〕古代において非常に重要であった「名誉」のテーマを取り上げている。これについては（ただしフィリ 2,6-11 に焦点を当てているのだが）J. H. ヘラーマン『ローマのフィリピにおける名誉を再構成する 恥のコースとしてのキリスト讃歌』（国際新約学会単行論文シリーズ 132）ケンブリッジ、2005 年〔J. H. HELLERMAN, Reconstructing Honor in Roman Philippi. *Carmen Christi* as *Cursus Pudorum*, SNTS.MS 132, Cambridge 2005〕参照。

〔フィリピの〕教会がパウロの喜びであり勝利の冠であるように（フィリ 4,1）、パウロはフィリピの人たちの喜びであり誇りであるべきである（フィリ 1,25-26）― つまり相互的な喜びと誇りが扱われている。

169　現在の苦難は将来の喜びに取って代わられる。

170　将来の側面はロマ書において明示的に表現されている。ロマ 12,12（τῇ ἐλπίδι χαίροντες ―「希望において喜べ」）とロマ 15,13（「希望の神があなた方をあらゆる喜びで満たしてくださるように」）参照。

171　2 コリ 6,2; ロマ 1,4; 5,1-6 参照

172　ないし死者の普遍的な復活の際に。C. シュトレッカー『パウロの境界的な神学 文化人類学的な視点からのパウロ神学への接近』（旧新約聖書宗教文学研究 185）ゲッティンゲン、1999 年〔C. STRECKER, Die liminale Theologie des Paulus. Zugänge zur paulinischen Theologie aus kulturanthropologischer Perspektive, FRLANT 185, Göttingen 1999〕、224 ページ参照。

173　「主にある」新しい存在をパウロはロマ 8,2.4.5.6 他多数で霊によって表現している。